

野幌森林公園クマゲラー斉調査 30回記念

クマゲラー斉調査 & クマゲラ・フォーラム 報告書



クマゲラー斉調査に向かう調査員たち 北海道博物館前 2016. 3. 12

平成 28 年 5 月

野幌森林公園を守る会

はじめに

—お礼とご報告—

3月12日に開催されました、「第30回記念野幌森林公園クマゲラー斉調査」及び「クマゲラ・フォーラム」におきましては、多数のご参加をいただき、盛況のうちに終了出来ましたことを御礼申し上げます。

お陰様をもちまして、調査結果では6～7羽という過去最高の記録を得ました。また、フォーラムでは110名以上もの多くの方にご出席していただき、講師は遠く岩手より来て頂くなど、日本を代表する研究者が一堂に集い、かつてないほどの盛り上がりで行われました。

ここに、クマゲラー斉調査及びクマゲラ・フォーラムの議事録を報告書として取りまとめましたのでお届けいたします。

今回の開催事業は、北海道博物館の共同主催をいただき、また、北海道新聞野生生物基金の助成金を賜り開催できましたことを改めて御礼と感謝申し上げます。加えて、調査及びフォーラムともボランティア参加にもかかわらず、多数のご参加ご協力をいただきましたこと、並びに関係者に対しましても厚く御礼申し上げます。

当会では、これからも「クマゲラの棲める森づくり」を目指し活動して参る所存でございますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

平成28年5月

野幌森林公園を守る会

会長 松山 潤

目 次

はじめに ーお礼とご報告ー

「野幌森林公園クマゲラ調査30回記念 クマゲラー斉調査&クマゲラ・フォーラム (2016年3月12日)」開催の概要	1
第1部 クマゲラー斉調査	3
野幌森林公園 クマゲラー斉調査2016速報	5
第2部 クマゲラ・フォーラム	9
○特別講演	12
講演1「本州産クマゲラ研究小史」 藤井 忠志 氏 (岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、NPO法人本州産クマゲラ研究会理事長)	12
講演2「クマゲラと生きる」 有澤 浩 氏 (元東京大学北海道演習林助手、森林生物研究所所長)	21
○パネルディスカッション	29
報告1「クマゲラの生物学」 藤巻 裕蔵 氏 (帯広畜産大学名誉教授)	29
報告2「野幌森林公園のクマゲラを守ろう」 富川 徹 (野幌森林公園を守る会事務局長)	33
パネルディスカッション	36
クマゲラー斉調査&クマゲラ・フォーラム アンケート調査結果	43
資 料 (開催プログラム・申し込み案内・新聞記事)	51

助成実績報告書

「野幌森林公園クマゲラー斉調査 30回記念 クマゲラー斉調査&クマゲラ・フォーラム (2016年3月12日)」開催の概要

1. 事業の狙い

クマゲラは、最大のキツツキで我が国では北海道と本州北部のみに生息します。本種は個体数減少等の危機などから保全管理が求められている希少鳥類で、昭和40年に国の天然記念物に指定されています。

北海道のクマゲラ生息情報は比較的多いものに対して本州では少なく、また一方、依然として道内外における本種の詳しい生態等の研究報告は多いとはいえません。

私たち野幌森林公園を守る会は、会の設立以来、大都市札幌近郊の野幌森林公園でクマゲラの棲める自然を残そうと、道民らの参加ボランティアを募って毎年3月にクマゲラー斉調査を行ってきました。今年度は、活動を始めてちょうど第30回目を迎えることから、今回これを記念して「クマゲラー斉調査&クマゲラ・フォーラム」を開催しました。

野幌森林公園をはじめ、道内外のクマゲラの生息の現状や課題を確認し、私たちはクマゲラをどう捉え、今後どうつき合っていかなければならないかなど、本種に詳しい研究者のお話を賜り、あらためて道民の声を踏まえながら議論を深めました。

2. 実施主体

主催：野幌森林公園を守る会

共催：北海道博物館 / 野鳥お勉強会

協賛：北海道新聞野生生物基金

協力：北海道野鳥愛護会 / NPO 法人本州産クマゲラ研究会

3. 実施の様子

場所は、札幌近郊の野幌森林公園でクマゲラー斉調査（第1部）が行われたあと、隣接する北海道博物館講堂でクマゲラフォーラム（第2部）が行われました。この記念すべきイベントの参加者は、一斉調査82人、フォーラム113人が集まり、盛況かつ有意義な成果のもと終始しました。（以下プログラムを抜粋）

〔第1部〕 第30回 野幌森林公園クマゲラー斉調査

〔第2部〕 クマゲラ・フォーラム

□ 特別講演

演題1：「本州産クマゲラ研究小史」藤井 忠志 氏（岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、NPO 法人本州産クマゲラ研究会理事長）

演題2：「クマゲラと生きる」有澤 浩 氏（元東京大学北海道演習林助手、森林生物研究所）

□ パネルディスカッション 15:20～17:00

○報告1：「クマゲラの生物学」藤巻 裕蔵 氏（帯広畜産大学名誉教授）

○報告2：「野幌森林公園のクマゲラを守ろう」富川 徹（野幌森林公園を守る会事務局長）

○パネルディスカッション

4. 成果・結果

フォーラムの特別講演では、藤井先生のお話は、本州産クマゲラ個体群を中心にした生態や形態、ブラキストンをはじめとする先人たちの活動、そして希少な本州産クマゲラの生息と分布、会活動の変遷など、本州に限らず日本のクマゲラの細かい部分にまで迫る分かりやすい内容でした。また、有澤先生は、東大富良野演習林を舞台にしたクマゲラの調査研究について、とくに恩師のどろ亀先生こと高橋延清林長の教えとそれらを取りまく状況などを踏まえながら、クマゲラを淡々と面白く楽しく興味深いお話でした。

パネルディスカッションの報告では、藤巻先生は、クマゲラについて、世界、日本、北海道（繁殖期）の分布からはじまり、とくに北海道の生息環境、生息密度、営巣・繁殖を主とした生態等について、まさしく大学での授業と思える「クマゲラの生物学」をコンパクトに話されました。事務局の富川からは、野幌森林公園の森の特徴と動植物、関係資料や書籍、守る会の活動経緯、クマゲラ一斉調査、クマゲラの生息と環境問題、保護保全に向けての発表がありました。

この報告のあと、パネルディスカッションが行われ、開催目的の道内外のクマゲラの生息の現状や課題を確認するとともに、私たちはクマゲラをどう捉え、今後どうつき合っていかなければならないかなどについての議論を目指しました。クマゲラ分布については北海道と東北の行き来や地域分布の状況、個体数では野幌の増加傾向と他の事例との比較による見方や考え方、難しいかも知れないが望まれる調査の検討（バンディング調査など）などとても興味のある対話ことができました。会場からは、野幌のクマゲラの経年的な整理についてのアドバイスや、野幌の個体群移動では幼鳥の分散把握が重要であることなどの参考意見もありました。時間がないことで、最後に「生息分布や個体数の情報を集め、今回のフォーラムを踏まえて、野幌はこうだが他の地域ではどうなのだろうか」、また、「先の出入りの状況など、いろんなデータがまだとれてないので、もっと調べて行かなければならないのがクマゲラではないか！」と締めくくられました。

【第 1 部】 クマゲラー斉調査

野幌森林公園 クマゲラー斉調査 2016 速報

記念すべき 30 回目の調査で過去最大の 6～7 羽を確認！



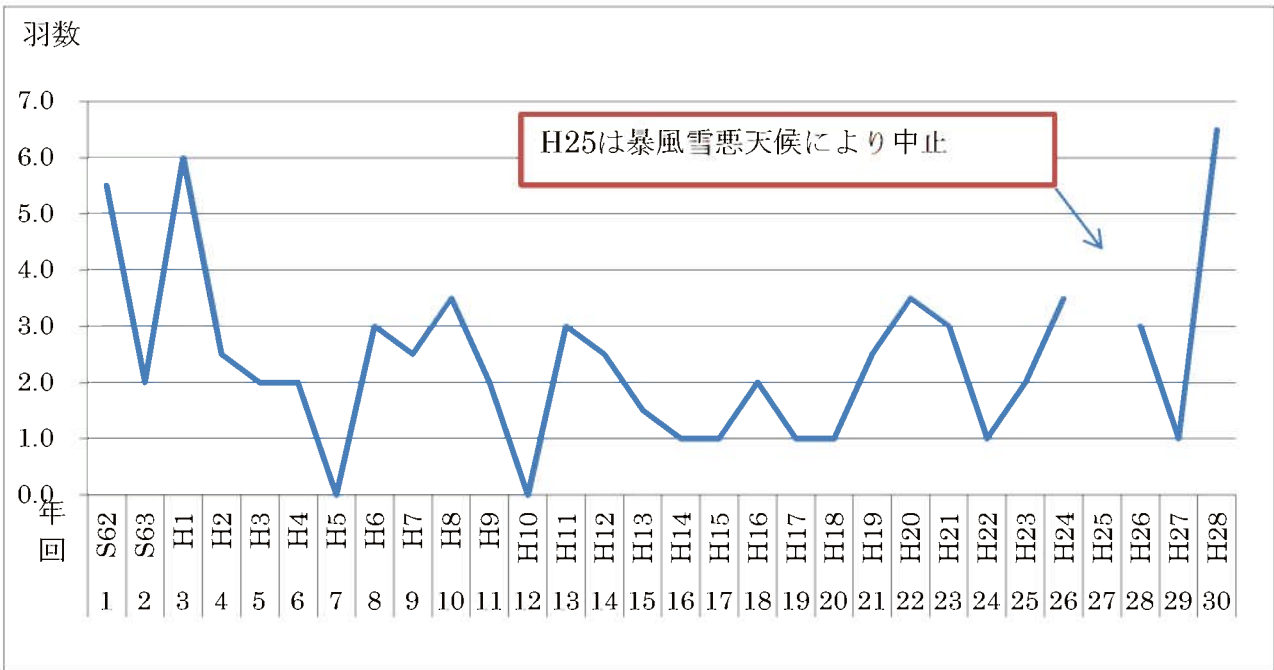
No. 42 メッシュで確認されたクマゲラ雌 今堀 魁人さん撮影

この度は「第 30 回野幌森林公園クマゲラー斉調査」にご参加ありがとうございました。お陰様をもちまして確認羽数は過去最高に並ぶ好結果となりました。野幌森林公園を守る会では今後ともクマゲラ調査をはじめとする、野幌の豊かな森を守る為の活動を続けてまいりたいと考えております。今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

野幌森林公園を守る会 会長 松山 潤

■経年変化から

調査開始の当初頃には5～6羽の記録もありましたが、その後は減少傾向で、しばらくは1～3羽程度を推移していました。今結果は過去最大の6～7羽となり個体数は一気に急増となりました、この現状をもとにこれからのクマゲラ生息と野幌森林公園の関係について、さらなる探りの必要性を意味しているように思います。これからも皆さまのご協力をお願いいたします。



■フォーラムと新聞掲載 (2016. 3. 13 北海道新聞)

当会としては26年前の集会以来の2回目の開催です。お陰様でフォーラムの参加者数は、当日の参加者もあり関係者をふくめると113人でした。

クマゲラの森守ろう


道博物館 研究者有沢さん講演

道内などに生息する天然記念物クマゲラに関するフォーラムが12日、札幌市厚別区の北海道博物館で開かれ、クマゲラ研究の第一人者として知られる東大北海道演習林(富良野市)元助手の有沢浩さんが「クマゲラと生きる」と題して講演した。

クマゲラはキツツキ科で、国内では東北以北に生息。有沢さんは1963年から、富良野市を拠点にクマゲラ研究を続けている。有沢さんはクマゲラの生態について、個体ごとにねぐらを持つことや、一度つがいになるとペアを代えないことなどを紹介。「(クマゲラの)一番の天敵は人間。ダムや道路建設で天然林を伐採し、すみかを狭めてきた」と述べ、動植物の生態系に配慮した開発の必要性を訴えた。

野幌森林公園(札幌市厚別区など)で年一回、クマゲラの生態調査を行っている市民団体「野幌森林公園を守る会」の主催で、約100人が参加。フォーラムに先立ち、30回目の調査が行われ、クマゲラ7羽が確認された。

(水野富七)



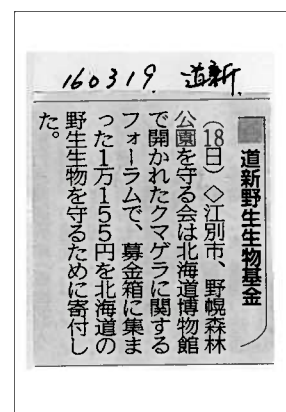
クマゲラの生態について紹介する有沢さん

■クマゲラー斉調査とクマゲラ・フォーラムの報告書について

本開催は、30回目のクマゲラー斉調査を迎えたことにより、これを記念して北海道新聞野生生物基金の助成を受けて行われました。よって、これら本調査の結果報告はもとよりフォーラムの内容（議事録）を1冊の報告書としてとりまとめ基金へ提出します。報告書の完成は5月上旬頃を予定していますが、その後は参加者を対象にメールによるPDF送付及び閲覧等のサービスを検討しています。これら詳しいことにつきましては事務局（富川）までお問い合わせください。

■野生生物基金のご協力

北海道新聞野生生物基金として、モーリー募金箱に皆様方から10,155円が集まり、全額を寄付いたしましたのでご報告いたします。ご協力ありがとうございました。



■アンケートのお願い

この度のクマゲラー斉調査とクマゲラ・フォーラムに参加いただいた皆さんからのご感想やご意見をいただき、今後の調査の進め方などに反映させたいと思っています。ついては別紙アンケート票にお答えいただきたくお願いいたします。返信封筒をご利用のうえ4月22日（金）までにお送り願います。 →事務局（富川）まで。

■調査中の写真を募集中！

クマゲラー斉調査時の調査状況写真（観察しているところなど）を、野幌森林公園を守る会の関連報告書などや、今後も共催予定の北海道博物館の報告書やホームページで利用したいのでご提供いただけませんか。よろしく願いいたします →事務局（富川）まで。

野幌森林公園を守る会 事務局

〒069-0835 江別市文京台南町 47-31 富川 徹 宅

Eメール : tom5@ruby.ocn.ne.jp

電 話 : 090-4874-1705

【第2部】 クマゲラ・フォーラム

○特別講演

講演1「本州産クマゲラ研究小史」 藤井 忠志 氏

(岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、NPO法人本州産クマゲラ研究会理事長)

講演2「クマゲラと生きる」 有澤 浩 氏

(元東京大学北海道演習林助手、森林生物研究所所長)

○パネルディスカッション

報告1「クマゲラの生物学」 藤巻 裕蔵 氏 (帯広畜産大学名誉教授)

報告2「野幌森林公園のクマゲラを守ろう」 富川 徹 野幌森林公園を守る会事務局長)

パネルディスカッション

第2部 クマゲラ・フォーラム

野幌森林公園クマゲラー斉調査記念 30回記念 クマゲラー斉調査 & クマゲラ・フォーラム フォーラム議事録

富川：第一部に引き続いて私が司会を務めさせていただきます。よろしくお願いたします。それでは、お待たせしました。第二部、クマゲラ・フォーラムを開催いたします。二部はこの時間13時30から17時までを予定しております。早速ですが、今日は第一部では本来の調査のクマゲラー斉調査を行いましたので、このクマゲラ・フォーラムに入る前に、今日の結果の概要報告（速報）を発表していただこうと思います。それでは、野幌森林公園を守る会会長の松山より発表してもらいます。それと、今日はクマゲラの映像が撮れましたので映します。

松山：守る会の松山と申します。本日は多数お集まりいただきましてありがとうございます。午前の調査に引き続き、という方も多いと思いますが重ね重ねお礼を申しあげます。

まず、午前中に行われた調査の速報ですが、幸いにも、5つのエリアで確認がされまして、姿を見たのが4羽、プラス、鳴き声が3羽、合計7羽という結果になりました。また、先ほど撮ったばかりの映像もご覧いただきます。これは42メッシュでした。



富川：後ろの角に座っている若い今堀さんが目の前で見られたそうです。写真を提供していただきありがとうございます。

松山：この映像の場所では雄と雌と両方確認されております。今、映っているのは雌になります。

（会場からの質問）すみません。ちなみに、参考までに、メッシュの番号、確認できたところを教えてください。いただければ、うれしいのですが…。

松山：今、集計中のところもありますので、パネルディスカッション前の休憩までに、メッシュに色付けしたものを受け付けの方で用意しておきますので、そちらでご覧になっていただきたいと思います。

それでは、引き続きましてクマゲラ・フォーラムを開催してまいりたいと思います。今回のフォーラムにおきましては、日本を代表するクマゲラの研究者が集まっただけでした。

特別講演では、東大富良野演習林で長年クマゲラの調査研究を行われ、皆さんご存知かもしれませんが、NHKのタモリの番組でもクマゲラの紹介がされました。豊富な調査経験と気さくな人柄で道内ばかりではなく日本中にファンの多い有澤浩先生です。

そして、本州産クマゲラの調査に長年携われ、本州産クマゲラの研究と保護に関する第一人者の藤井忠志先生です。

パネルディスカッションの講演では、道内のクマゲラを長年にわたって研究され、日本鳥学会の会長を歴任されました道内鳥類研究の第一人者でおられます藤巻裕蔵先生。そして当会の方より、野幌のクマゲラの現状に関して、富川より発表がごございます。

これらの発表と議論を通して、クマゲラの置かれている現在の状況、そして今後の保護対策について有意義な議論が深められ、将来の保護に繋がっていただければと期待をしております。本日はよろしくお願いいたします。

富川：それでは早速、特別講演の方に入りたいと思います。

まず、演題1「本州産クマゲラ研究小史」としまして、岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、NPO 法人本州産クマゲラ研究会代表の藤井忠志さんをお願いしたいと思います。今、松山の方から紹介がありました、藤井先生は、秋田県生まれ、現在、岩手県立博物館にお勤めです。詳しいことはお手元の講師プロフィールがごございますので、そちらをご覧ください。ではよろしくお願いいたします。

○特別講演

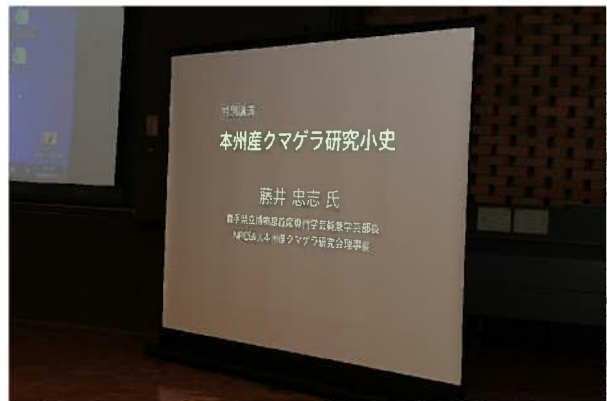
●「本州産クマゲラ研究小史」藤井 忠志 氏（岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、NPO 法人本州産クマゲラ研究会理事長）

藤井：こんにちは。藤井です。

岩手県の盛岡からやってきました。本州のクマゲラを追っかけて35年以上になるのですが、北海道と違いまして本州のクマゲラは幻中の幻(まぼろし中のまぼろし)という鳥で、なかなかお目にかかれな、貴重な鳥です。私がクマゲラの生息地を探し回しまして、10年間かかりました。初めてお目にかかるまでに。ということで、北海道の方々、非常に羨ましいなと思っています。

早速、「クマゲラ研究小史」ということでいきます。
(以下、映像により発表)

これは、今日の主人公のクマゲラです。白神山地の雄のクマゲラです。見事なブナの巨木です。(白神山地は)北海道とは全然違う環境のようなところに、非常にうらやましい環境にいます。特徴としまして、体長は約45cm、秋田県では「ヤマガラス」という俗名がありまして、「クロテラキツツキ」とか「クロゲラ」、「オオトリ」とかさまたまな呼び方をされています。



頭が赤い。雌の方は後頭部のみ、雄の方は頭頂全体が赤いということで、誰が見ても雌雄の区別ができます。あと、虹彩が黄色である。したがってコンセプトカラーは黒、赤、黄色の3色になっています。鳴き声が独特で様々あります。巣穴や採餌痕がほかのキツツキ科に比べて独特で大きい。ドラミングが大きい、インターバルは40秒ないしは50秒程度という感じになるでしょうか。足の指については対趾足構造である。前2本、後ろ2本、キツツキ科は(*Picoides* ミュビゲラ属以外)全部そうなのですが、あとは個体数が少ない。本州での推定個体数は90~100羽ぐらいで、非常に危ない領域に推移しています。1965年(昭和40年)に、イヌワシと同じ日に国の天然記念物に指定されました。ボウシゲラ、*Mulleripicus* というタイやマレーシアにいる世界で2番目に大きい、体長51cmぐらいあるボウシゲラ属がクマゲラ属に近いのではないかと海外の研究者が言っております。

これが「ボウシゲラです。先日、岩手県立博物館で行われたクマゲラ展でもちょっと展示しましたけれど、クマゲラに似ております。主食はアリです。

学名については、*Dryocopus martius* です。*Dryocopus*というのは樫の木をたたくという意味で、*martius*というのはラテン語の読み方で[marutius]と読みますが、古代ローマ歴で3月を表します。したがって、学名の意味としては「3月に現れ、黒いマントをつけて樫の木をたたく男らしいキツツキ」という意味になります。ほかの日本産キツツキ、全部で12種類ですが、そのうち、特徴的なものだけ紹介します。

2012年の鳥類目録改訂(日本鳥学会)によりまして、日本産キツツキとして新たに追加されたのがチャバラアカゲラです。日本では3例の観察例があります。北海道の渡島、石川県の舳倉島、そして新潟県です。新潟県の標本は、岐阜県博物館に剥製標本として残されているようです。*Dendrocopos hyperythrus*、*hyperythrus*というのは下腹が赤いという意味です。*Dendrocopos*というのはアカゲラ属という意味です。これが新たに加わりました。

それから、世界広しといえども、1属1種のキツツキ、沖縄のヤンバルにしかないキツツキ、学名が*Sapheopipo noguchii*、*Sapheo*はスペシャル、*pipo*はウッドペッカー、特別なキツツキ、野口源之助さんにあたえられた献上語ですね。これは雄のノグチゲラです。6年前に撮影したものです。DNA上はオオアカゲラに近いということが最近の研究で判明しているようです。したがって、*Sapheopipo noguchii*ではなく*Dendrocopos noguchii*となるべきなのですが、学名についてはそのまま運用しています。

これは、私よりみなさんの方が詳しいと思います。指が本来4本あるべきはずが3本しかないミュビゲラ、*Picoides tridactylus* 北海道の大雪山界隈でしか観察できていないというキツツキです。キーワードとしては大雪山、エゾトウヒ、風倒木、カミキリで、北方森林鳥類調査室のメンバーが調査しているようです。北海道野鳥だより(北海道野鳥愛護会)に最近掲載されており、川辺百樹さんが執筆しています。井上元則さんが日本で初めてミュビゲラを発見したようです。昭和17年のことです。

次はアオゲラです。北海道にはいません。本州のほうです。日本固有種ということになっていますが、北海道にはヤマゲラがいますが、津軽海峡を境にして本州以南にはアオゲラということで、アオゲラという和名がそのまま学名に与えられ、*Picas awokera*と表記されています。固有種、本州の方では普通種です。腹部に斑模様があります。

これは、アオゲラが木造家屋に開けた穴です。こんな悪戯をします。「うるさいので何とかしてくれ」と、博物館によく電話がかかってくる。

これは日本産キツツキ12種の中で唯一絶滅してしまったキツツキです。同じクマゲラ属ですね。*Dryocopus javensis* キタタキです。1920年(大正9年)10月16日の記録を最後に、日本から姿を消して

います。長崎県対馬の御岳というところですか。そこで捕られたのが最後の標本になっております。この標本については、岩手大学農学部の教育資料館の中にあつた資料で、大正5年に購入されたものです。宮沢賢治が2年生の時ですから、おそらく賢治はこの標本を見ていたと思います。これと同じ亜種を現在、見るためには、北朝鮮に行かなければ見ることはできません。

キツツキ科の足の指の構造と舌骨について説明したいと思つています。これは、ちょうど巣口に止まる瞬間のところですか。足を伸ばして、尾羽を一直線上に伸ばしています。なかなかこういう写真は撮れないのですが、これは森吉のクマゲラです。足の指の構造についてですが、先ほども言いましたが、対趾足構造、前2本後2本です。内側から第1指、2指、3指、4指となります。後指、内指、中指、外指、右側の方も時計回りに、左側の方は反時計回りに番号が与えられています。

特に脚の指の構造が頑丈なのは、この1番と2番と4番、第1指、第2指、第4指が長母趾屈筋、骨格と筋肉をつなぐのが腱の役割で、複雑な動きを制御しています。人間でいえば親指を制御している腱なのですが、それが1、2、4番につながっているということです。ですからキツツキ科の脚の指の構造が頑丈にできているということが想像されます。この脚の指を使って幹にしがみつくといいこととなります。さらに両方の脚の指のほかに、尾羽が重要な役割をするようです。これは森吉で拾つた雌の成鳥の尾羽です。テンに襲われてそのまま落命した個体です。尾羽は12枚ありまして、両側の2枚についてはすごく柔らかい、おまけのような尾羽ですが、残りの10枚については非常に頑丈、剛毛です。特に、真ん中の4枚については、羽軸が非常に太くて頑丈にできています。指で折れ曲げようとしてもなかなか曲がらない。よく見てください。先端がさらに二股に分かれています。3点で指示するといつながら尾羽10枚で幹に張り付けて、上へ下へと、クッションのように使って動く。この尾羽がなければ、なかなか木の幹にしがみつくといいことはできません。

次に舌の構造ですが、独特の舌の構造をしています。これは野外で見ついていた時、舌をペロツと出した時の写真です。これをよくよく見ていきますと、この個体はヤマゲラですね。これは北海道の方から送つていただいて骨格標本にした時に撮影したものです。先ほどの舌を2つの舌骨という軟骨が支えています。それが喉の下を通過して後頭部をまいて、最終的に右側の鼻の穴、鼻孔に収まっている。これは模式図ですが、これはペロ、舌ですね。これが2本の舌骨で、後頭部をまいて、鼻の穴に収納されている。これが、アカゲラ、アオゲラ、ヤマゲラです。これもアオゲラです。右の方に収まっています。

これは北海道の方からいただいた個体で、ネズミの罠にひっかかり、剥製標本にはならなかつたので、骨格標本にしてみたものです。そうしたら、舌骨が右側は右、左側は左と別々に収まっていることが分かりました。全部は調べていません6種類までです。いずれ、全部調べようと思つています。

模式図では、こうなっています。舌、そして舌骨が右、左と分かれています。そして、さらに、クマゲラの主食はアリです、ほかのキツツキも食べますが、アリは蟻酸を出します。その蟻酸に対応するために、中和しなければなりません。つまり、アルカリ液を分泌させなければなりません。そのアルカリ液を分泌するところがステンソン

(Stenson) 氏腺、この黄色い部分ですが、舌骨、舌がこのステンソン氏線のわきを通過しているということです。ステンソン氏線からアル



カリ液を分泌してアリの蟻酸に対応しているということが分かっています。他にもいくつか疑問があるのですが、特に、ドクウツギなどは人間が食べたらいちころなのですが、食べても平気だという理由が分かりません。たぶん、ステンソン氏腺が備わっているからではないかと私は思っていますが、良く分かりません。

ここから、クマゲラの分布と研究小史に入っていきます。

クマゲラは、世界的に見ると、北半球からベルト状に生息しています。日本では、北海道、本州の北東北3県でしか今のところ確認されていません。

世界ではかつて、クマゲラを3亜種という見方をしておりました *Dryocopus martius martius*、*Dryocopus martius pinetorum*、それと、*Dryocopus martius khamensis*、という個体群もいるそうです。クアンガイ(ベトナム)からチベットまでの西中国にいます。これはイギリスのペータース(1948年)という方の分類です。根拠は良く分かりません。

最近の分類はこうなっています。2亜種で分類されています。*Pinetorum*が*martius*の扱いになっています。日本の北海道や本州北部のクマゲラは*martius*に分類されています。

あと、これが、生態が良く分かりませんが、クアンガイ(ベトナム)~雲南~チベットにかけて隔離的に分布している *khamensis* とに分類されています。この位置ですね。ここにしか生息していないという種ですね。(地図上で確認)。この *khamensis* については、別な扱いをした方がいいと言っています、オーストリアのウィンクラー(Winkler)という分岐分類学者が提起しております。

これは、北海道のクマゲラの分布を表しています。今日、会場にいらっしゃいます藤巻先生が調べた分布です。これについては、後で藤巻先生からお話があると思います。北海道の場合には、全道に万遍なくクマゲラが生息しています。ただ、本州と違いまして、ブナが黒松内までしか分布していませんから、黒松内以北については針葉樹も使っているようです。本州の場合にはすべてブナです。ブナ以外は使っていません。

これが北東北3県のクマゲラの位置です。これが白神山地、十和田、八甲田、奥羽山脈、森吉、それから、不思議なのですが、わずかながら北上山地にもいます。かつては、南東北、栃木県の日光にまで生息していたという古記録も残っています。

ここから本州のクマゲラの研究小史に入っていきます。

川口孫次郎さんです。昭和9年、1934年の4月にクマゲラの情報を聞きつけて八幡平に入ります。地元には猟師の情報でした。その前の年、1933年、昭和8年に、地元の猟師から、クマゲラかキタタキ、最初はキタタキと思ったそうです。猟師に腹が白いか白くないかという質問をしているようです。「クマゲラの実験」という報告書の中に残っています。この方は、当時、京都大学に籍をおいていまして、鳥の声の聞きなしの研究をされておりました。川村多実二さんという教授の下で講師をしておりました。1934年に入ります。4月7日から12日までの約6日間、この間に運よく雌雄の2羽を捕獲することができました。当時の捕獲というのは、撃ち落とすことです。八幡平の玉川温泉の界隈で、うまくクマゲラを射止めました。ということで、本州にいないはずの鳥が、当時、本州にいるということになったわけですから注目の的となり、上へ下への大騒ぎになったわけです。

この川口さんの報告書は、京都大学の地下3階のお茶箱の中に眠っていました。八幡平の「クマゲラの実験観察」という報告書で4月23日に清書されています。これが、所謂、川口標本と呼ばれるもので、

京都大学の後に国立科学博物館に移管されて、現在、収蔵庫に眠っております。先日のクマゲラ展で、「研究所小史」の展示のためにこれを借用してきました。上の方が雌、下の方が雄です。でもこれ、よくよく調べていくと、上の雌については、川口さんが捕獲したのですが、下の雄については川口さんが捕獲していません。その前の年、1933年という日付になっておりますので、この時、川口さんは八幡平に入っておりません。この事実については、まだ、発表していません。何れ、国立科学博物館の西海功さんには、報告しています。

これが雌の標本のラベルです。鹿角郡宮川村国有林で、1934年4月10日、これは正しい日付ですね。川口さんが入った日付ですね。ところが雄については、そうじゃないということが、最近分かってきました。当時は、クマゲラを捕獲したということで、全国版ニュースにもなったり、これは、昭和9年の4月17日の記事ですけれど、報知新聞とか、朝日新聞とかですね、下の写真についてはつぶれていますが、川口さんがクマゲラの雄か雌かどちらかを手に持って写真撮影されています。「川口博士ついに発見」という見出しですね。

これは、当時、日本鳥学会の会長、当時は会頭と言いましたが、内田清之介さんと川口さんとのやり取りです。内田清之介さんは場所指定の天然記念物にしたいので、その経緯について、状況について、簡単にいいから教えてくれ、と……。大体1年ぐらいかかるかもしれない、という内容の文章です。

それで、結論的には、北海道から渡って来たものを、たまたま、川口さんが捕獲したものと結論付けられています。この部分です。「八幡平に10月末に来て、翌年の4月中ほどに去る」という記述です。つまり秋口に渡って来て春先に、また、戻っていくという風に結論づけられています。

なぜなのかというと、ブラキストンですね。ブラキストン・ラインがあって、クマゲラは北海道の方に生息する鳥という、そういう分類になっていたためです。これがブラキストンです。函館に在住してまして、イギリスの退役軍人で、当時、貿易商をしております。4~5千点ほどの鳥類の標本を収集していて、本州にいる、または北海道にいる鳥という分類の仕方をして、その分類からすると、津軽海峡に分布のラインがあるのではないかということで、ブラキストン・ラインというのが提唱されていくわけですが、ブラキストンは、帰国する直前の1883年に、東京築地の商業会議所で、このことを発表します。この時に、討論に立った工部大学(現在の東大工学部の教授にあたる)の教授ジョン・ミルン、当時、地震学、とか考古学に関わっていたこの方が、津軽海峡を分布上、「ブラキストン線」と呼ぼうということをご提案し、これが支持され、ブラキストン線というのができあがるわけでありました。

これがジョン・ミルンです(写真)。ジョン・ミルンという人も北海道と関係があります。北海道の堀川トネさんという人、函館のお寺の住職の娘さんをお嫁さんにしております。この間を取り持ったのがブラキストンです。ブラキストンとジョン・ミルンは非常に仲が良かったということです。函館の水路開削に貢献した願乗寺の住職、堀川乗経の長女をお嫁さんにもらっています。それで、トネさんはイギリスに渡って骨を埋めることになるわけです。

よくよく調べてみると、本州の伊達藩(仙台)の鳥類図譜の中にクマゲラを模写した雌の絵が存在するということが分かっています。所謂、「観文禽譜」のクマゲラという言い方なのですけれども。黒ゲラ、山ゲラということで、もう、江戸時代、すでに、クマゲラは本州の森の中に、定着していたという、一つの裏付けになると思います。この添文、つまり説明文にはどうということが書かれているのかよく見てみると、「奥州会津山中にて獲られしを見しに、烏に似て全身黒く頭真紅なり。日光山中にもあるという」記述です。福島県会津にはもちろんですが、栃木県日光の山の中にもクマゲラはいるよ。ということが

書かれています。これは江戸時代です。これが書かれているのが「観文禽譜」または、「堀田禽譜」という言い方をします。

現在、宮城県図書館に所蔵されております。日本でもあまり数多く残されていません。江戸時代、最高水準の鳥類図鑑、百科事典ともいえるもので、Encyclopaediaとも言われています。これが「観文禽譜」です。先ほどの絵が中心でしたが、こちらの方は説明文です。所謂、解説書ですね。

この「観文禽譜」は、実は、黒田長禮さんが、カンムリツクシガモが、種として存在するかしないか、雑種ではないのかと、学会で論争になった時、雑種ではなくて、まちがいなく種として存在していたということを裏づける根拠になった本です。また、世界で初めてシジュウカラガンを紹介したという本です。

この「観文禽譜」を編纂したのが堀田正敦という人物です。伊達藩の第6代藩主伊達宗村の第8男坊。非常に有能な方で、佐野藩（栃木県）に養子に出ます。当時の老中、松平定信は、寛政の改革で有名な方ですが、その才能を見抜き、堀田正敦を若年寄として抜擢します。寛政の改革そのものは6年で頓挫しますが、正敦はその後幕政に関与して、42年間、若年寄として君臨します。没年を見てください。1832年。観文禽譜が完成したのが1831年。翌年に堀田政敦は亡くなっています。37年間の歳月を費やして作られたのがこの観文禽譜です。

この観文禽譜の存在を世に知らしめたのが、当時の鳥類研究者、岩手県一ノ関出身の熊谷三郎という方です。熊谷さんの本職は酒屋さんでしたが、酒屋はほとんどほったらかしにして、鳥の研究をして、当時、一流の鳥類研究者たちと交わっていました。黒田長禮先生に師事をして、初代環境庁長官だった大石武一さん、山科鳥類研究所の初代所長、山科芳麿、靱山徳太郎さんなんかと親交がありました。三郎の文献は、齊藤報恩会や他の所に分散してしまいましたので、今はなかなか追跡できていません。

これは熊谷三郎が自費出版した「仙台付近の鳥」という本です。1951年ですね。紙が不足していた時代で、藁半紙のような本ですが、この本の中のクマガラの項で、観文禽譜について紹介をしています。

三郎の一つ前、先代の太三郎さんも、こういう文化人と交流がありまして、幸田露伴、尾崎紅葉、北村透谷などが熊谷家に入出入りしていたようです。英語の家庭教師には、島崎藤村を雇っていたようです。

というわけで、熊谷家は一流の文化人と交流がありました。

舞台は、秋田県の森吉山に移ります。当時は高度経済成長期で、昭和40年代、50年代です。その頃、森吉山に「ブナ征伐」と称して、ブナの皆伐が持ち上がりました。それで、最初は今現在、我々が調査のフィールドの中心にしている場所なのですが、ここの素晴らしいブナを伐採して、独立採算に備えるというやり方なのでしょ



うけれど、川口孫次郎さんの発見に端を発して、当時、森吉山山岳会の会長であった庄司国千代さんが、「八幡平にクマガラがいるのならば、山続きの森吉にクマガラがないわけではない」ということで、クマガラ探しを始めました。昭和45年に発見して、撮影もしましたが、当時のカメラの望遠機能があまり良くなくて、クマガラか否か、判別ができなかった。その情報を、私の大学の先輩で、師匠である泉祐一氏に提供しました。泉さんは富良野の有澤先生のところに何

度も通って、クマゲラの生態を勉強された方なのですけれど、昭和 50 年、ついにクマゲラの写真撮影に成功します。

その 3 年後、本州で初めての繁殖を確認します。昭和 53 年、1978 年のことです。それで、皆伐にストップがかかることになりました。330ha が国設鳥獣保護区に指定されました。現在はさらに拡大されて 1,175ha ほどが保護区になっております。

またまた、舞台が移ります。白神山地です。青森県と秋田県を峰越して結ぶ林道です。一面が 45,000ha のブナ林です、左側が白神岳です。右側が向白神岳、1,243m ほどあります。とにかく、見渡すかぎり、一斉のブナ林です。ブナ、ブナというところで、どこにいるのか、現在地が分からなくなるほどのブナ林です。

これは、経済交流の名のもとで、春秋林道を作るという計画が、1981 年に持ち上がりました。しかし実のところ、秋田県で切るべきブナの木がもうなくなってしまって、青森県からいいブナを持って行って、何とかそれを売り払って採算を立てるという計画です。急斜面に無理やり道路を通すために、1 年で使えるのはわずか 4 か月、残りの 8 か月は道路の補修をしなければならないという状態で、全然経済効率が上がるわけがないじゃないか。ということを行っているのですけれども、林野の方では全く分からない。ここは奥赤石林道というところですが、一日一日こういう感じで皆伐されていって、大事な一番いいところのブナが伐採されてしまいました。

これでは埒が明かないので、クマゲラの緊急調査隊を日本自然保護協会が結成しました。東大、千葉大から援軍を送っていただいて、秋田大の小笠原先生を中心としたメンバーで入りました。つまり、ここ白神山地でクマゲラ探しをすることになります。イヌワシがいるとか、クマタカがいても、林野行政は全くひるみません。クマゲラを出せば、効果はてきめんということで、クマゲラ調査隊を結成したわけです。

運よく工事予定の奥赤石林道近くの櫛石山でクマゲラが発見されます。師匠の泉さんが偶然にもクマゲラの生息を確認します。この時、案内したのが、私たち本州産クマゲラ研究会顧問の根深誠という人物なのですが…。

あとは、日本自然保護協会の工藤父母道氏が、頑張っておりました。この 3 人の結集された力で、何とか春秋林道に待ったをかけることができました。

1989 年には白神の櫛石の平というところで、初めて、クマゲラの繁殖まで確認できました。この時の雛の数は 4 羽でした。

まあ、これが私の師匠ということで、真ん中が根深誠です。植村直己氏の後輩で明治大学山岳部 OB です。現在、私たち NPO 法人本州産クマゲラ研究会の顧問として、様々、ご指導いただいております。それから私の師匠の泉祐一です。道なき道を案内したのが根深誠で、また住民を反対運動に結集させたのも根深誠です。クマゲラ探しは泉祐一、そして、対政治交渉は、工道父母道です。工藤父母道は小樽出身の方です。この 3 人の力によって、それ以外にももちろんいるのですけれども、うまく、相互作用が働いて、プラスの方に動いて、白神が日本初の世界自然遺産に登録されることになったわけです。

今のことをまとめると、根深誠の行動力をはじめとする 3 人の団結力、地域住民の運動の成果ですね。史上最高の反対者が署名した意義意見書などがありました。それからクマゲラの存在が何より一番だったということです。最終的にはマスコミが見方をしてくれた。反対運動を始めた最初の頃は、馬鹿にし

ていたマスコミなのですが、反対運動を進めていくうちに、マスコミが理解を示してくれて、こういう形に持っていった。



現在、白神山地は観光客で潤っていますが…。ブナ林を広くに残すことの意義についてですが、遺伝子資源の宝庫としてのブナ林。ペニシリンなんかの抗生物質が多々貯蔵されている。「今後、人類に貢献できるだろう」重要な遺伝子の宝庫。現在、難病・奇病にとされている、エイズやエボラ出血熱なんかでも、そういうものにも対抗できる土壌微生物が多数、潜在している可能性があるということで、現在、21世紀に生きる我々人類にとっては、これを後世に残す、引き渡す大きな責務があるだろ

うとよく言われます。

これは、新たな展開をむかえつつあるということの中間報告です。私は、直接遺伝子の分析・解析までしていません。私らがクマゲラの羽毛や死体などを提供して、弘前大学農学生命科学部生物学科の黒尾正樹先生に解析していただいています。黒尾先生は日本のアホウドリの遺伝子を解析して、アホウドリの遺伝子多様性などを調べた方です。東邦大のOBです。黒尾先生にこれを提供して調べてもらいました。これというのは、巣立ち前、数日前からいなくなった雌の個体でした。

2006年6月18日、巣立ち間際になっても雌の親が全く巣にやってこなくなった。雛が巣立った後、周辺部を調べました。特に倒木を調べたところ、倒木の周辺に羽毛が散在していた。まだ、血のりがついていた羽毛でした。ミトコンドリアDNAの解析にはうってつけだったようです。性別判定をしたところやっぱり雌だということがわかりました。さらにこの遺伝子を調べたところ、なんと、おかしな結果が出ました。

この森吉の1個体のサンプルが、*khamensis* (カメンシス) に近いという結果がもたらされています。ということなのか？頭が混乱するような感じなのですが、*martius mrtius* (マルティウス マルティウス) の方じゃなくて *khamensis* (カメンシス) に近い。それで、黒尾先生も、おかしいと思い、2回。3回と、同じ分析を繰り返したそうです。それでもやはり、結果は同じで、*Dryocopus martius khamensis* に近いということが分かっています。したがって、この1個体については、今まで採取してきた白神や森吉の他のサンプルとはかけ離れた遺伝子結果ということがでてきたようです。後に、北海道の方からも笹森繁明さんたちからもいろいろ提供していただいて、北海道7サンプル、本州15サンプルを解析したところ、本州産のものはサンプルが多いにもかかわらず、多様度が低い。つまり、均衡弱勢が始まっている可能性があるんじゃないかと黒尾先生から言われています。北海道産のサンプルについては、健全である。今のところ大丈夫ということが言われています。

これが *khamensis* (カメンシス) の分布です。なぜこれが森吉にいるのか、ということなのですが、リス氷期という今から約25万年前に大陸と繋がっていたころ、朝鮮半島を経て、大陸から入ってきた個体群が温暖化によって北上せざるを得なくなり、森吉山界隈にたどりついて、それが現在にまで生息、種を維持し続けているのではないかという推測です。これについてはあくまでも推測ですので、今後の研究が待たれます。

オーストリアのウィンクラーという分岐分類学者は、この *khamensis* (カメンシス) を亜種ではなく、クマゲラの別種とすることを、現在、提案中です。根拠は良くわかっておりません。だから、今後ますます、森吉界隈の個体群、森吉以南の新たな生息地を発見すべきと…。後は、*Mulleripicus* ボウシゲラですね。それについてもクマゲラと近いということが言われていますので、今後、精査すべきではないかと思われまます。

この写真は、本州で我々は、こんな感じで、北海道と違いまして、ノーブラインドでは調査できません。ブラインドをがっちり張ってやります。(ブラインドの写真)

これは苦小牧ですが、カメラマンがこの周辺部をとり囲んだために、ストレスにさらされて、孵ったばかりの雛を捨て去る瞬間です。

それからこれは樹洞内システムです。これは今日来ているうちの会の金沢聡副理事長が梯子をかけて登って、巣穴から撮影した産室・産座の様子です。もちろん、巣立った後に、調査をして残留物を採取しております。この時は、雛の頭部、頭蓋骨ですね、そのミイラ化したものが出てきました。

後は、私のやっている展覧会、今年度で岩手県立博物館、最後になりますので、置き土産です。クマゲラに焦点を絞ってやりたいということで、前々から計画をしておりました。これが盛岡駅構内の電飾で、これは博物館の入口です。これは特別展示室のデコレーションです。真ん中にクマゲラの営巣木のレプリカを立てて、所狭しとクマゲラ、クマゲラで囲みました。これは、真ん中はカービングです。今日会場にいらしております北尾久美子さん制作のクマゲラです。このカービングについては、あまりにも出来が良くて、来館された皆さんは、クマゲラの剥製だと思って素通りしてしまう、そのぐらい、出来がよかった。これは、藻岩産の笹森繁明さんからご提供していただいた雄の巣立ち雛です。落鳥してしまったものです。巣立ちがかなり遅れてしまって。これは、雄の剥製標本です。後は、展覧会場の様子です。これは北海道のクマゲラの生態写真です。主に、苦小牧、小樽などで今日会場にいらしていません井上大介さんが撮影されたものです。

本州のものについては、私たちが撮影しました。大体、生態写真、A1 サイズで 80 枚展示してあります。それ以外の写真も含めると 120 枚の写真で会場をおおいました。非常に好評でした。また、ハンズオンコーナーを設けまして、クマゲラの営巣木の産室内部のレプリカを設営しました。卵も置いておきました。これもハンズオンコーナーで、クマゲラが嘴だけで開けるブナの木はこれほど堅いよ…。実物大のレプリカの卵も置いてあります。あと、うちの会員が作ってくれたクマゲラのぬいぐるみも置いてあります。これは最終日にうちの会のメンバーと記念撮影したものです。これは展示解説会で来館された方々に、説明をしているところです。井上さんが自分の写真を撮影されたときの状況などの説明をしているところです。後は、講演会もやりまして、今日、講師でお見えになっております有澤浩先生にも登場していただきまして、また、左側は船木信一君と言って、秋田大学の私の後輩です。クマゲラの音声を解析した関係で、講師としてお話していただきました。

ここからは、クマゲラとは関係ありません。実は昨日で 3.11(東日本大震災)から 5 年目になります。実は私も被災者です。私の家内の実家が岩手県の山田町です。家内の実家も、もちろん流されました。親戚は 7 人ほど亡くなりました。7 人亡くなって、まだ 2 人の遺体が上がっていません。という状況で、復興、復興と言いながら、道半ばというという現状です。これは、津波が襲った瞬間です。これが、私が 10 年間暮らした妻の実家です。本当はこの辺にあったのですが、流されて、2 階だけ残って、1 階は

潰れて、その残骸です。うちの家内が、これからどうしようかと途方にくれているところです。手のつけようがないという感じでした。

まあ、困ったのは人間だけじゃなくて鳥も困りました。これはウミネコです。ここは国道45号線です。ここを走っていた道路ですが、津波が押し寄せたために、土が盛り土のようになってしまいました。これがいい感じで、コロニーを奪われたウミネコたちは、これ幸いとばかりに使い始めた。仮説のコロニーです。道が混んでいて、後ろからクラクションを鳴らされるのを我慢して、撮影しました。これは撮っておいてよかったです。こんな形で、ウミネコたちも頑張っておりました。

以上で、私の講演は終わります。

●「クマゲラと生きる」有澤 浩 氏（元東京大学北海道演習林助手、森林生物研究所）

富川：ありがとうございます。

本来ですと、ここで質問なんかもいただきたいところですが、時間の都合で続けさせていただきたいと思います。後ほど、パネルディスカッションの中で、質問等ございましたらそこをお願いします。

それでは、特別講演の二つ目に入りたいと思います。題は「クマゲラと生きる」ということで有澤浩先生にお願いしたいと思います。プロフィールにも書いてありますが、皆さん知らない人はおられないと思います。北海道のクマゲラと言えば有澤先生ということで、私も若いころから有澤先生の本を教科書にしてきました。今日は先生の思いなども含めましてお話していただけたと思います。先生よろしくをお願いします。



有澤：初めまして、有澤と申します。

今日は30回目の調査日に当たったようで、ご招待を受けまして、この度富良野から出て参りました。

今日のクマゲラー斉調査にも参加させていただき、私は大沢のメッシュ5番を担当することで歩いてきました。残念ながら成果を上げることができなかったです。でも今日は7個体の確認ができたそうですね。

この2000haの森で、最大4番いはいけるのじゃないですかね。今まで2番いまで確認しているようですから、

30回から40回への調査を重ねまして、ぜひ、4番いの同時繁殖の成果を上げていただきたいと思います。私は80歳ですからその頃にはもうこの世にはいないと思いますが、皆さんの努力を信じております。

私は富良野にあります東京大学の演習林にいましたが、そこには、250mから1450mぐらいの標高(の間)に広大な面積の天然林の森が広がっています。2万3000haの広さをもっています。この森は、森林環境がとてもバラエティに富んでいます。そして、この演習林には、人間が人工的に作った植林し



た場所はほとんどないと言っていいほどです。90パーセントは天然林で占められています。ただし、手をまったく入れないというわけではありません。長年の調査の蓄積によって、こういう環境の森は1年間にどれくらい太る（成長する）のかという調査をして、データを取っていて、森の林相ごとに調査しています。この森は圧倒的に広葉樹が多いとか針葉樹が多いとか、こまめに分類して、森全体の成長量を調べ上げておりました、そのデータに従って伐採量を決めています。例えば、標高500m～600m以下の森林、トドマツが主役ですが、シラカンバ、ウダイカンバなどの針葉樹と広葉樹が混ざり合った森林では、10年間で1回伐採に入ります。100haぐらいの面積ですね。この時、切ろうとしている林の成長量はどれだけあるのかということ、先のデータから読み取りまして、伐採量は10年間に成長した量の17パーセントだけ収穫（伐採）させてもらうということです。そういう決まりを作って伐採に入っています。それも択伐という抜き切りです。

このやり方は、「どろ亀先生」と言われた高橋延清林長の長い間にわたっての現地での研究から考えだされたものです。

今、切ろうとしている森で、この木は寿命に近づいている、成長の頂点にきているから、これ以上価値を高める木ではないと、判断して切る。あるいは、むちゃくちゃに枝を伸ばしている広葉樹は下から生えてくる若い木の成長を阻害しているから切って、下の若い木を伸ばしてあげる。我々はこれを暴れ木と言ってますけれど、あまり木材価値のない木を整理して若い世代の木を育て上げるようなやり方で森林をつくっています。

非常にこまめなやり方です。営林署の方、個人の林業の方、道有林の方が視察にお見えになります。どろ亀先生が熱弁ふるって、森の育て方、管理の仕方を説明しています。後ろの方にいる研修を受けている人たちは、「こんな庭師のようなことはやれんぞなあ。」と。そういう陰の声をよく聞いています。確かにその通りだろうと思います。非常に緻密に手をかけて、手をかけて、やっておりました。

また、当時は財政豊かと言いますか、林業労働をやってくれる方が大勢いらっしゃいました。しかも安い賃金で日雇いという感じで応援に来てくれる方が近郊にたくさんいらっしゃいました。そういう人たちのお蔭で随分作業は効率よく出来たのだらうと思います。ですから、今も天然林の森がかなり広く、広がっています。

そこで今日の「クマゲラと森のかかわり」という本題に入りますが、クマゲラが森をどう活用しているかということ、調べあげたいと思っていましたが、昭和38年にその研究に取り掛かりました。まだ、クマゲラが天然記念物に指定されていない時代でした。

東京大学の森林動物学教室から赴任されて来られた先生は、クマゲラを見るために北海道に来たような先生でした。その先生のお手伝いをさせていただきながら森の動物たちを勉強させてもらったのですが、当時、本州から津軽海峡を渡って北海道に転勤してくるということは、東京サイドでは、命がけだった、あるいは、命がけの覚悟がいるという時代だったそうです。

送別会の席で、「お前はクマに食われて死んでしまうだろう」とまで言われたと、その先生に聞かされました。「その山の中に、鳥好きの若いのがいるから一緒に歩け」と、言われたと…。

私は運良くその先生のお手伝いをすることになったのですが、だけど、何のことはない、私は、そのヒグマ恐怖症の先生のヒグマ露払いですよ。先生の前に私が犠牲になるという立場で、私はその先生のお手伝いを命ぜられたと、今でも思っていますが…。そういうことでクマゲラに取り掛かったのです。

その時の職場の同僚は90人ぐらいいたのですが、ほとんど現場に出での仕事をしていました。その方々に、こんな鳥を見つけたら教えてください。と情報収集をしていたら、すぐですよ。「真っ黒い鳥だべさ。でっかいんだべ。木の穴で子育てしているよ」と、3年目ぐらいで情報がはいった。

その当時、カメラの望遠レンズなんて及びもつかない時代(昭和40年前後)でしたから、先生はパールという蛇腹式のカメラで、クマゲラの巣穴に向け、最大限近づいて写していた。もちろんブラインドに隠れていましたが。出来上がった写真を見ると、本当に見上げるような写真になって写っていました。

この写真が野鳥という雑誌のグラビアに載りました。もちろん観察記録も載りましたが。そうするとこの写真を見て、わんさとクマゲラを求めて大学演習林においてになるお客さんがかなり増えました。

高名な清棲幸保という先生も来ました。録音の蒲谷鶴彦さんも来ました。両方とも立派な大学者でした。その方たちに弁当を届けに行ったり、道案内をさせていただいたりしました。

今度は、自然・野生鳥獣のカメラマンが来ました。これからカメラマンになろうという人達ですが。その方たちのお手伝いをさせてもらいましたが、クマゲラの巣を撮影する時、カメラアングルで邪魔になる木や枝を切らせてくれと言うわけです。私は許しませんでした。そういうことを言うカメラマンが増えて、特に報道関係者が入ってくるようになってから、多くなってきました。

どろ亀さんが、私の話を聞いて、「邪魔になる木は払ってあげなさいよ。」と、おっしゃいました。どろ亀先生は、森林の良さを、森林のしゅくみを日本の全国の人たちに何とか分かり易く伝えたいものだ



と常々おっしゃっていました。はじめはラジオの番組に出ておりました。そのうちテレビの時代に入りまして、自然番組が出てきました。是非うちでも森の中での撮影をしてもらって、森を全国にアピールしたいというふうになりました。当時は「自然のアルバム」という番組がありました。日曜日の朝15分で白黒の番組でした。けっこう評判のいい番組でした。それに、森の野鳥を主役において番組を作ってもらいたいとNHK札幌放送局に掛け合いました。札幌放送局もOKをしてくれたのです。

それでこの番組のねらい目に当たったのがエゾライチョウという鳥だったのです。あまり数の多くない鳥だったのです。今も多くありませんけど。エゾライチョウを中心に据えて「自然のアルバム」を作るといことになりまして、取材計画が出来上がりました。そして、そのためにはエゾライチョウの巣を探さなければなりません。地べたに巣をつくる習性を持った鳥で、天然林の中で繁殖します。どろ亀先生がそのエゾライチョウの巣を探せということになったのです。

それで90人いた職員総出で、ほとんど80人ぐらいの人が、一つの森に入りました。人海戦術です。10mぐらいの間隔をおいてダーッと、エゾライチョウがいる森を探していくのですね。

ところがですね。エゾライチョウという鳥は、全く地べたの色、枯っ葉の色と同じ体の色、保護色と言われる色なのです。こういう鳥は素人さんが見たって分からないです。その上、ドーンと度胸が据わっているといいですか、母性本能といいですか、雌が抱卵しますけれど、人間が卵をあたためている親鳥の1m前を歩いても微動だにしない、逃げない、動きもしない。だから、ついつい見過ごしてしまうということが圧倒的に多くなります。

一日目、80人が6時間ぐらいかけて一つの山を探し回りましたが、まったくの空振りでした。二日目に2つの巣が見つかりましたが、その見つけ方が可笑しいのです。一つは標高250m~800mの山を登るグループが尾根に出た時に、疲れ果てて「もうこんなことはやめた！」と森の中で寝そべった職員の腕の先にエゾライチョウが卵を抱いていた。卵は7つありました。もう一つは下の方で見つけました。昼食時間になって皆さんが弁当を開いている時でした。林長の次のクラス(役職)、部長さんぐらいの人が前の晩、徹夜マージャンでクタクタになった。それで、(朝の)集合時間に間に合わなかったのです。やっと、お昼の時間帯になって現地に着いて、彼が座って弁当を開いていたその切り株の下、自分の股の下にいた。この巣には卵が9つありました。

この2つが見つかって番組の撮影が何とかはじまりました。うまく孵化まできれいに映して、番組として放送されました。

そういうどろ亀先生の下で、クマゲラを調べることが許されて、研究を始めたのです。私は何を言っているのでしょうかね…。

私はそもそもの発想が、「クマゲラと森のかかわり」をつきとめようということでした。ところがクマゲラについて何も分かっていない。先ほどの藤井さんのお話の中で、日本語で書かれたクマゲラの文献は皆無に等しいころの時代でしたから。西口先生もさっきのクマを怖がった先生の後についてクマゲラを初めてみられた。

それから、私がクマゲラの研究を始めようと思いついた時には、その先生はすでに大学に帰られていませんでしたから、ただ、一人でポツポツ森の中をうろうろ歩いていたのです。

その時偶然にも、クマゲラが「オレを見ている！」という感じですね。突然「コロ、コロ」と鳴き声が出て、私の目の前10mぐらい前を飛んで行ってポンと止まった所に巣穴があった。そこにスーッと入っていった。ものの3~5分も経たないうちにスーッと出て飛んで行った。私は中に卵が孵って雛がいると思いました。私は待つて、待つてほしい2時間ぐらい経った時に、そこに飛んできたのはメスでした。最初はオスでした。メスも3~5分ぐらいで飛んで行った。今から考えると、雛はまだ小さかったころでした。

それから、クマゲラの子育て状況を調べようとクマゲラの巣を探して2本目を見るわけですけど、だいたい同じタイプの木なんですね。我々は胸高直径というのですが、胸の高さのところの木の太さが40cmくらいです。けっこう太いですよ。林業科では大木の分類に入ります。2本ともそういう木でした。そして、電柱みたいにまっすぐ伸びている。野幌森林公園にもたくさんありますね。今日、見せてもらいましたが。そういうまっすぐな木で、最初の枝がたいへん高いところから出ています。例えば、13mぐらいの高さとか、そこで初めて枝がでてくるようなスパーツと伸びている木です。そういう2本の木を見てからは、そういう木ばかり見て、森の中を歩き回りました。

幸いクマゲラは一回巣を作ったら、3年、4年、5年と使ってくれる。だから、調べるのに都合がいいのです。1本見つけた。2本見つけた。3本目は何処だ。と、見つけていきました。

私が一番多い時には13本見つけました。その13の巣で同時繁殖しました。大変忙しかったですけど、その13ヶ所のお互いの距離、どれぐらいの距離を置いてクマゲラが子育てしているか地図にプロットしてみましたら、平均して3kmぐらいでした。AからBの距離、AとCの距離もだいたいそれぐらいでした。そうしますと、半分を分け合っていると仮定すると1.5kmぐらいですね。半径1.5kmの円の面積

が子育てする時には必要であると考えるとその広さは300haぐらいとなり、けっこう広いですね。そういう広さに「一番い」ずつ離れて繁殖しているようだということが分かりはじめました。

クマゲラにとっては食べるものと住むことが欠かしてはならない条件なのですが、その300haの中で餌を賄わなければならないのです。特に問題なのは、冬場の食糧です。夏は森の中で倒れて腐っている木だとか、古い切り株だとか、ボケボケになった木の中にいっぱい昆虫がいる。例えば、カミキリムシの幼虫だとか、ゾウムシの幼虫だとか、そういった甲虫の幼虫がけっこう棲んでいる。それをつついて中から取り出して食べています。夏場は省エネでやれるのです。

ところが12月の中ごろになると、それらはいっきに雪に覆われてしまいます。食べられなくなります。じゃあ、どうするかと言いますと、その年に新しく枯れた木です。その皮の間にキクイムシやゾウムシの幼虫がいっぱい入っている。その皮を剥ぎながらそこにいる昆虫をついばんで食べていますが、この枯れ木もまたたく間に食べ尽くしてしまいます。



その後どうするかと言いますと、森の中で生きて立っている木です。どこでどう分かるのか、かれらはそれに大きくボーリングします。調べてみたらアリですが、1cmぐらいのヤマアリの仲間です。そういうものを主食みたいにして、掘り出して食べて、冬場の食糧を調達しています。

そのボーリングの仕方はすごいですよ。クマゲラの場合には最初は円形から始まりますが、穴の形が丸い形から長方形のような縦長の四角になってきます。私が見た大きな穴は長さが1mぐらい、幅が20cmです。それだけ掘りあさった例がありますが、これは1年じゃない。1回ここに餌があると認識したら、毎年必ずこの木にきます。それが3年から5年くらい続けてきます。食べ尽くしてしまうと、その後は来なくなります。そういうことが分かってきました。

そんな餌をとる木はどんな木かと言いますと、トドマツやエゾマツなど針葉樹が圧倒的に多いです。富良野ではそういう木はクマゲラにとって欠かせない木だと認識したわけですが、それからクマゲラの巣をつくる木は、まっすぐ伸びた木ですね。枝の高い木です。冬場、餌をとる木は我々が外からみても中に虫がいるかどうかは全く分かりません。クマゲラはどうして分かるのか、まあ、およその想像はつきませんが、とにかく、めざとく中に木にいる虫を掘り出しています。

もう一つ、クマゲラの生活で欠かせないのはねぐらという木をもっていることです。自分のねぐら場所ですね。大木が腐れた木。中が腐れ落ちて空間になっている大木です。これは圧倒的に広葉樹に多いです。富良野ではシナノキがほとんどを占めておりますが、そういう木を選んでねぐらとします。

ねぐらの場合には、避難場所なのですかね。避難口、非常口でしょうか。一本の木に1mほどの間隔をおいて出入り口を点々と開けます。だいたい3つか4つが普通ですけど、中には、よほど気に入ったと見えて13個、開けたという例もあります。何でこんなに要るのかと思うでしょうけれど、私も何でこんなことをするのだろうと思います。

わずか一回ばかりしか経験ありませんが、夕方、そのねぐらにテンが入り込んだことがありました。クマゲラは日没ごろにそのねぐらに帰ってきます。そのねぐらに見を隠しながら休息することになりますが、そこを狙ってテンが一番下の穴から入った。すると、同時に一番上の穴からクマゲラが飛び出し

て避難しました。穴が3つ、4つあっても、お気に入りの玄関（出入口）があるんです。必ず同じ出入口から出入りするのです。ところが、テンが侵入した時には、普段使わない穴から、飛びだして逃げるのです。非常口ですね。

このねぐらは可笑しいのですよ。夫婦でもメスが来ると追っ払う。メスのところにオスが来ても追っ払われる。自分の雛たちでさえそのねぐらを使わせません。自分一人のものです。個体、個体によって所有物が決まっているようです。それぐらいきつく身内でもやっていますね。

クマゲラは、文化財、国の天然記念物ですから、勝手に捕まえられない。何かやるときには、文化庁や環境省の手続きをして許可をもらってはじめてやれるのです。どうにか許可をいただいて、捕獲してカラーリングを両足に付けて個体識別できるようになりました。太郎、次郎、花子とか名前を付けられるようになったんです。

そういうふうな流れで調査を始めたのですが、12羽の成鳥に足環をつけてその経過をみた時に、一番長くその個体を見れたのは9年間でした。それから7年というのも何個体もありました。平均寿命は分かりませんが、少なくとも、9年以上は生きられる鳥だということが推察されるようになりました。

それから、ペアは片方が亡くなるまで絶対に変えません。一生付き合います。浮気して逃げられる場合があるかも知れないけど、突然帰ってこないということがありますが、まあ私は事故だろうなと思っています。

9年以上生きる鳥であって、ペアを変えないで、ずっと同じ場所で繁殖を続ける鳥であるということが分かるようになりました。

それから、雛はどこへ行くのでしょうか。一つのクマゲラのペアは1つのなわばり的なものをしっかり持っている。毎年、同じペアが、同じなわばりで、同じ巣をつくって子育てをしております。そういうことは分かったのですが、雛はどうなんだろうということで、雛にもかなりの数の足環をつけて飛ばしたのですが、秋口までは何とか見られたのですが、それ以後まったくみられません。職場の同僚たちにもお願いしてあったのですが、死亡個体も出てこないし、目撃した例も出てこない。どこへ分散していくのか、まったく分からないでいます。

今はかなり技術が上がっていますから、GPSとか、いろいろなものを使いながら、クマゲラの位置を確認できるようになるかも知れません。あるいは、なっているのかも知れませんが、そういう時代が来て、雛たちがどこへどうしていくのか、どのぐらいの雛が一冬越えて生きながらえて生きているのか、そういうことを調べてみると、かなりクマゲラのためになるんじゃないかと思っておりました。

もうあまり時間がありませんが、エピソードとして、クマゲラの大敵、何が怖いかというと、人間ですよ。やっぱり…。まず森林の開発、今はなくなりましたが、かつてはダムを作った時代があった。それからスーパー林道、高規格道路、高速道路、あのためにどれだけ森林を伐採したか。その分、クマゲラのすみかがなくなっていく。狭められてきているわけです。

それと、クマゲラの写真を撮ってお金になるのでしょうかね。私は一つもお金にならないのですがね。とにかくクマゲラの写真を撮りたがる人が多いですね。昨日もちょっと仲間の人達と話したのですが、大阪とか本州勢が圧倒的に多い。そして、北海道のどなたかの情報で一つの巣を見つける。教えてもらうのです。それを自分の持ち物にしています。大阪のおじいちゃんは時代劇で見る「牢名主」みたいです。口コミでクマゲラの巣を知って写真を撮りに来た人達がずいぶん集まるのです。おじいちゃんはクマゲラの巣の前において、その人たちに采配するのですね。「お前はそこだ。お前は後から来たんだから

あそこだ！」と、全部指示されてやっています。そのおじいちゃんは、リモートコントロールを使って一番いいところにカメラをセットしていて、バシャ、バシャ、撮っている。そういう人達がずいぶん増えてきました。

さっきの藤井先生の話にもありましたけれど、そういう犠牲になった巣もあるようです。富良野でもそういうカメラマンが圧倒的に多いです。



キャンプ場なんかで、あんな所に巣を構えるクマゲラも悪いのですけれど、キャンプファイヤーの真横の木に巣穴を作った。6月ごろオープンして始まりますが、その時はクマゲラも子育てをやっている。その真前で、どんどんキャンプファイヤーをやっているのですよ。若い人達は踊り狂っているのです。それでもクマゲラは逃げません。巣を放棄したためしがないです。子育てを無事終えて、その場所を飛び立って行きます。そういうこともあります。

ちょっと話がそれますが、秋田の森吉山のクマゲラを見せていただきに行ったことがあります。北海道のクマゲラは友だちみたいなものです。顔を覚えてくれているんじゃないかと思えるぐらい、富良野の森のクマゲラは、全然、警戒しないのです。

ところが、秋田に行きますと、想像もできないくらい遠くから、神経を使って隠れて見るのですけど、それでも警戒して来てくれないですね。あの時は4人がそのねぐらの周りに張り付いたんですけど、点々と張り付いているんですよ。クマゲラはそれに気を使ってなかなか帰ってこない。薄暗くなっても、近くには、いるのですけれども、ねぐらに入らないのです。

富良野の場合は平気なものです。何も被らないでもテントにも隠れないでも、スーッと入ってくれるんですよ。

足環をつけて個体識別をした時はねぐらの前にカスミ網を張って捕獲しました。そのぐらい悠長なクマゲラです。富良野のクマゲラは、網にかかった時にはものすごい悲鳴を上げますけれど、それで、お腹を上にして仰向けにするのですが、野鳥たちはこうすると案外おとなしくなると言われていますが、あの嘴で指先から血が出るほどかみつかりました。つつくんじゃないのです。かみついて引っ張るんです。痛いものですよ。

それから考えた方法が、ビニールホースを切って、嘴に差し込んで、それで、体重を測ったり計測したり20分ぐらい作業をしてホースをはずして飛ばしました。もう暗くなっていますので、離すとストレートに自分のねぐらに戻りました。あれには、私も驚きました。本当は内実、ものすごく心配でした。多分このねぐらは放棄されるだろうなと覚悟はしておりました。

12羽か13羽に足環を付けましたが、ほとんどが、そういう例です。全然私たちに警戒していないのです。特段、慣らしたわけでもものですけど、そういう個体が多い。やっぱりクマゲラだって個性は持っていますから。秋田の森吉山で見た個体がものすごく神経質な個体なのかも知れませんが…。全部が全部あのようではない気がします。

それからクマゲラの天敵で怖いのは、アオダイショウですね。クマゲラの巣穴というのは、高さ8m～9mのところの出入り口を作るんですが、そこまでアオダイショウは登ってきますね。しかし、私は

成功した例を見たことはありません。必ずストーンと落ちてしまいます。巣の出入口登りつめても、その段階で落っこちてしまうのが圧倒的に多い。というのは、巣を作る木は素直にまっすぐ伸びた木で、なおかつ、木の肌が滑らかなんです。分かりやすく言えば、シラカンバ見たいみたいにするべした肌の木です。富良野ではトドマツが多い。そういう木を選んで巣を掘りますが、もう一つすごいなと思うのは、そのまっすぐ伸びた木がどちらかにわずかに傾斜しているのです。その傾斜の内側に出入口を掘ります。

ヘビは木の背中側を登って行きます。そして巣穴の高さにたどり着いたら、最後に表の巣穴のほうへ回り込もうとすると傾いていますから、ヘビの体重を持ちこたえられなくなり、ストーンと落ちてしまいます。そこまで彼ら(クマゲラ)は考えています。すべすべとした木、大きな太い木、枝が高いところからしかついでいない木、なおかつ、どちらかに傾いている木、そういう木を選んでいるのです。

巣を選ぶ決定権はお母さんが持っています。お父さんは近くで3つ、4つ、候補の木を選びます。そして、小さなきっかけの穴を作ります。その3つ、4つの木の中で、最初にお母さんが掘り出したその穴に決定です。つまり、計画は、お父さんが立てて、決定権はお母さんが持っている。なかなか利口な鳥だと思います。

いろいろ話しましたが時間がなくてごめんなさい。

彼らの一番大事なのは冬の餌を採る木です。先ほど言いましたが、富良野の場合、エゾマツ、トドマツなど針葉樹が9割を占めます。太さが35 cm以上の木です。というのは(このぐらいの太さになると)、中にアリが巣づくりできるような、内部中心部が腐ってきてもろくなり始めます。そのもろいところにアリが侵入してきてコロニーを作り始めます。ですから、森の中で針葉樹、広葉樹は問いませんが、トドマツ、エゾマツは冬場の彼らの餌の供給源として欠かせない木としてあるということです。

それから、天敵の話の中で人間が一番ダメだと言いましたが、それからアオダイショウ、エゾクロテン、そして、最近ではダニによって雛が死んでしまった例が何件か出ています。そういう時代になってきましたね。

大変突拍子もない話になるんですけども、クマゲラの巣立ちを百何十回も見ていますが、一度だけ変な例を見たことがあります。

もう巣立ちするのに十分な期間、巣の中でいつでも出ていい状態になっている。お父さん、お母さんが周りで出てこい、出てこいと誘い出すのですが、その誘いにのれない雛たちがいました。親は出てくるまで雛に餌をやりませんから。そうするとしゃにむに親のところに行って餌をもらおうとして飛び立つという場合があるのですが、この時の雛は飛べないのです。あんなの初めて見ました。

これまで百何十回見ていますが、その巣の3羽ともそうでした。ドスンと下に落ちるのです。羽ばたきますが、飛び上がれないのです。肥満児だったかどうか分かりません。5、6年前の話ですが、そのころ鳥インフルエンザというのが、かなりマスコミをにぎわした頃だったのですが、私もそのことは頭にあったのですけれども、そんなところに降りたら、周りにカラスがちゃんと待機しているんです。私は捕まえて、木の幹に止ませました。そしたら登っていけました。あれは何だったのでしょうか。私のはっと気が付いた時には、2羽の雛を登らせた後でした。

私は、すぐ、家に帰る途中にある温泉に行って、もう、徹底的に身体を洗って鳥インフルエンザを予防したつもりでした。お陰様で今のところなんでもありません。助かったのだらうと思います。

ごめんなさい。ずいぶん漫談になってしまっ、長い時間になりました。終わります。

富川：ありがとうございました。

時間も押していますが、ここで休憩を10分ほど取りたいと思います。15時25分までとしますが、ここで2点ほど連絡をします。先ほど、速報結果をお知らせしましたが、後ろの方のホワイトボードに、今日のクマゲラの記録されたメッシュを示してありますのでご覧ください。

それと、今日の調査とフォーラムは北海道新聞野生生物基金から助成金をいただいております。後ろの方に募金箱が置いてありますので、是非とも募金箱をいっぱいにしたいと考えております！？皆様のご協力をよろしくお願いいたします。それでは休憩に入ります。

○パネルディスカッション

●「クマゲラの生物学」藤巻 裕蔵 氏（帯広畜産大学名誉教授）

藤巻：ただいま紹介いただきました藤巻です。私はクマゲラを専門に研究している訳ではありません。鳥類一般のことをやっています。今日お話す前半の分布については自分で調べたデータに主に基づいていますが、後半の生態に関するものは今から20年近く前、私の所属していた研究室の学生さんが卒業論文で調べたものです。今日ここに来ています玉田さんがその一人です。クマゲラの生態を卒論のテーマでやった学生さんだった人です。

それでは始めたいと思います。(以下、映像により発表)

まず、最初に形態ですが、先ほど藤井さんと有澤さんが詳しく話しましたし、今日、調査に参加された方はクマゲラのことを良く知っていると思いますので詳しい説明は省略したいと思います。

まず最初に、クマゲラの世界における分布を見てみますとアジアからヨーロッパまで、だいたい森林地帯の北部に分布しています。日本では北海道と東北地方の一部ということです。

これは、日本における分布ですが、普通、分布図で図鑑等にでていましてはこのようなものです。左側は、日本野鳥の会が出しているプリントガイドです。茶色に色がついているのが年中同じところに分布していることを意味しています。これで見ますと、北海道全体が塗りつぶされていますので、北海道にいることは分かりますが、北海道のどこに分布しているのかという細かいことは分かりません。右の方はマーク・ブラジルが日本の鳥類という本を出していますがそのなかに上げている分布図です。これも同じように北海道内の細かいところについては分かりません。

これは、環境省が全国で鳥類の繁殖調査をやった結果ですが、メッシュに区切ってどこのメッシュにいるか、いなかったかということを表わしているものです。左が1974年から1978年にやった第1回目



の繁殖調査、右が1997年から2002年にかけてやった調査です。これで見ますと、だいぶ観察された場所が減っているように見えます。メッシュ法ですとだいたい山岳地帯、山間部の森林にいたことがほぼ読み取れることができると思います。この調査が今年から5年がかりでまた全国調査をやるという計画ですが、この、1974年から1978年、1997年から2002年にかけての調査は環境省でやりましたが、これからやろうとする調査は、環境省では予算がないものですからボランティアでもって野鳥の会とかバードリサーチの皆さんが全国から調査員を募集して2016年から調査をすることになっています。この中で鳥の分布に関心のある方は、是非登録していただいて調査に加わっていただきたいと思います。

これは、もうちょっと細かく北海道をメッシュに区切って分布を調べたものです。この、ひとつ、ひとつのマルがありますが、このマルがこれまで調査を行ったところです。ひとつのマルが5万分の一の地形図を縦横4つずつに区切ったもので、縦横4つに区切りますと5万分の一の地形図で16区画の区画ができます。ほぼ北海道の場合は一つの区画が5キロ四方になりますので、通常はこれを5キロメッシュといいます。ここに凡例が書いてありますが黒マルが生息を確認したところ、白マルが調査したのですが生息が確認できなかったところ、点で示しているところがまだ調査していないところです。これは私自身がやった調査と、論文等から拾い出したもの、個人の記録をお借りして拾い出したものです。今まで調査が終わったのは主に十勝地方です。これは私が帯広にいた時と、退職してから美唄に住むようになってからこちらのほうを主に調査していますが、まだ道南とか道北それから道東も北の方はちょっと調査が進んでおりません。これだけ調査をするのでも約35年かかっています。この5キロメッシュが北海道全体で約3600あるのですが、これまで調査したところが約900で、それで35年かかっていますから、死ぬまでかかっても全部埋めることが出来ない、ということです。これを見てもうだいたい、山間部に出てくる例えばこのへんですと後志地方の余市岳から樽前にかけて山間部ですね、それから大雪山系、日高山系、阿寒、十勝と釧路の間の白糠丘陵そういった山間部に出るとということが分かります。こちらの図は国有林の分布図ですが見ていただきますと、ほぼ、国有林に重なります。ですから、まず国有林と大学演習林が主なクマゲラの分布している場所ということになります。

これは、先ほどのメッシュで調べた調査の結果ですけれども5キロ四方のメッシュの中に2キロの調査するルートを設定して調べるわけです。そのルートの主な植生をハイマツ林、常緑針葉樹林、針広混交林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地、住宅地に分けてみますと全部調べたのが1036の調査です。そのうち何%の林に出て来たか、というのが色の濃いところです。これで見ますとハイマツ林にはいません。同じ森林でもカラマツ林にもいません。常緑針葉樹林、針広混交林、落葉広葉樹林がクマゲラのでてくる林ですが、どちらかというとなら針広混交林がやや多いかなと思います。農耕地が出ていますけれど、これは、たまたま農耕地の後背地に森林がありましてそこでクマゲラの声が聞こえたので一応、農耕地の調査地が出たということになっていますが、農耕地そのものにクマゲラがいたということではありません。申し遅れましたが、これは全て4月下旬から7月上旬までの繁殖期だけの結果です。非繁殖期には結構クマゲラは本来生息しない環境にも出てきますが、そういうデータは含まれておりません。

これは1900年代の始めに阿寒国立公園でクマゲラの調査したときの結果ですが、黒マルは繁殖期に観察されたところ、二重マルは非繁殖期に観察されたところ、白マルは調査したがクマゲラが確認できなかったこということを示しています。一つの四角はさっきの分布図と一緒に5キロのメッシュを表しています。これで見ますと阿寒国立公園の弟子屈町側は国有林です。こちらの阿寒町側は、今は飛翔地に

なっていますが、阿寒町側は前田一步園の山です。これで見てもと弟子屈町よりも阿寒側のほうがクマゲラの生息、出てくる率が高い。これは国有林に比べて前田一步園の林のほうでクマゲラが良く出てくるということを示しています。国有林ですが先ほどクマゲラの分布を全体的に見ると国有林の分布と重なると申しましたけれど、全体的に見ると同じ国有林でも特定地域に区切って見ますと前田一步園のように非常に森林の形態を維持したまま木を切っている、先ほど有澤さんの話にありました抜き切りということをやっていますので、木が大規模に伐採されて高木が無くなるという環境ではありません。それに対して、こちらの方はかなり木を大規模に切っています。

これは、調査をしたときの国有林の林班率なのですが、ここが足寄から阿寒に抜ける国道です。国道からオンネトーに入る道路がありまして、これがオンネトーですね。オンネトーの道路の幅狭いところマークが一つついています。これは国立公園の中でも第一種の特別地域、2つついているのが第二種、3つついているのが第三種です。第一種はあまり木を切っていない、ところが、これから50mほど入るとほとんど皆抜に近い状態で木を切っています。ですから、観光客が頻繁に通る所はほとんど木を切っていないので皆さんが観光バスでここを通りますと国立公園の中はいい林が残っているなど感想をお持ちになると思いますが、車から降りて50mも入るとほとんど木がないという状態です。川湯から摩周湖にかけて道路沿いは幅50mくらいで木が残っていますが、それから50mくらい入るとほとんど皆抜に近い状態で木を切っています。そういう状態ですから弟子屈町側はクマゲラが非常に少ない、それに対して一步園の方はクマゲラが多いことが分かります。先ほど有澤さんの話で一番のクマゲラを減らす原因として森林の伐採をあげましたけれどもこれは一つの証拠になるとと思います。

生息密度ですけれども、密度が高い場合には300haに1つがい、これは有澤先生が言った有澤さんのデータに基づくものです。密度が低い場合は1000haに1つがいということで北海道の場合はだいたい300haから1000haで1つがい繁殖するというふうにみていいと思います。

繁殖の経過ですけれども、だいたい3、4月頃までが造巢、その後産卵、抱卵が14から16日、育雛が



31から32日で、だいたい巣立ちが北海道の中央部で6月20から25日の間、道南では少し早くなり20日前後、道東・道央でも標高の高いところでは少し遅れて場合によっては7月に入ることもあります。

営巣木とねぐらですけれども左の2つが営巣木です。これは何回も有澤さんが話していますので省略しますが非常に直立している木で下枝がない木で、それから右の方がねぐら木です。これまで調べたうち営巣木に使われている樹種はトドマツ、アカエゾマツ、ヤマモミジ、イタヤ、オヒョウ、ミズナラなど、そこに書いてあるような樹木が使われますけれども、道

中央部はほとんどトドマツでした、道東にいきますと落葉の広葉樹が営巣木に使われるこという例が多かったです。営巣木の傾斜、これも先ほど有澤さんの話にありましたが巣穴の方向にどれほど傾いているかということで、マイナス2.5度というのは巣穴の方向と反対の方向に傾いている木ですが平均すると6度、巣穴の方向に傾いているということです。これは巣穴から糸をたらして垂直と木の傾きを、糸の垂直と木の傾きの角度を計って調べた結果です。

営巣木のある環境ですけれども、右の写真にありますように周りが笹地の中に灌木が立っているような場合もありますし、それから、左下のものは上川ですが林の中に突き出た高い枯木に作っています。比較的その周辺が開けているという場合が多いです。巣の数は忘れましたが調べた巣の周辺の木々の密度は1ha当たり81本から2150本、平均で686本、北海道の平均は1000本くらいなので1ha当たり686本というのは比較的、木々の密度としては低いほうだと思います。図に円が4つ描いてありますけれども中心の黒マル巣で、矢印は巣穴の向いている方向です。点線で区切って巣穴のある方向と巣穴のない方向との木々の密度を比べますと、巣穴のある方の方向の木々の密度が低いことという例がすべてでした。これなどは巣穴のある方向には木がまったくなくて林淵部に巣を作っているということです。

これまで調べた巣の中では、例えば足寄から阿寒に抜ける国道沿い、足寄峠のところで国道脇に作っている巣がありました。これは1年間使っただけでその後は使いませんでした。やっぱり国道のように交通の激しいところではあまり好んでは繁殖しないと思います。

巣の形態ですけれども、左の図は巣穴の大きさaとbですが縦が9.5~16cm、横が7~10cm 縦長の巣です。巣の中ですけれども、深さ=fと巣穴から天井にかけての空間=eを足したものが44~60cm、h=巣穴の横の径が17~27cm、gが22~43cmです。先ほど有澤さんの話では胸高直径が40cm以上ないとだめだというのはこのような大きな巣穴を掘るということがあります。巣の高さは、一番低もので1.9m高いものは18mで平均では7.8mでした。

これは、雄と雌の繁殖における役割分担です。抱卵期ですけれども黒いのが雄、横線の部分が雌で、だいたい雄、雌交代で抱卵しますが一方の方の抱卵時間が3時間から4時間でそれくらいつと交代します。もう一つの特徴は、夜は必ず雄が抱卵します。ということで24時間のうち雄、雌の抱卵時間の分担率を計算しますと、夜は必ず雄が抱卵しますので平均して雄は67%、雌は33%で、だいたい3:7の割合で抱卵をしています。

雛がかえった時、前期、中期、後期と分けますが、前期は雛が小さくてまだ自分で体温調節の能力がありませんから親が雛を暖めます。そのために、抱卵期と同じようなパターンが見られますが、片方の雄か雌かが抱いている時間は抱卵期より短くなって1時間から3時間で交代します。この場合も夜は必ず雄が雛を暖めます。中期になりますと、日中はほとんど、縦の線は餌を運んできたとき、中に入って餌を与えとすぐに巣を出て行くということで巣の中に留まって雛を暖めることはありませんが、夜間はやはり雄が雛を暖めています。後期になると餌を持ってくるだけで、夜間も雛を暖めることはありません。

餌を採る場所ですが、これも、今まで大分話しが出てきましたので詳しくは省略します。左の方がトドマツで生きているトドマツに穴を空けて、中の蟻を食べています。食べた後です。右の方は抜根で半分腐ったところにいる虫を採っている。夏の間は抜根や地上でも餌を採るのですが、雪が降りますと、先ほど有澤さんの話しのように、立っている木でしか餌を取れませんので、林業の上では枯れた、立っている木を残しておくのはあまりよくないらしいのですが、森林の動物のためにはそういう木も取っておいた方がいいということが言えます。

食べ物は巣の中から取り出した残渣を蟻の分類をやっている専門家に調べてもらったのですが、ほとんどがアリです。ムネアカオオアリとかいろいろ名前が書いてありますが、一番多いのがムネアカオオアリでした。それから、あとはカミキリムシの仲間です。

それから、森林の中には木が大きくなりますと、自然に樹洞ができる場合もありますが、それほど自然に樹洞ができることという例はありません。アカゲラとかクマゲラが巣穴を彫りますと、そういった巣穴がそういう樹洞を利用する動物達が再利用するという点では非常に重要な役割を果たしています。そういう意味でキツツキ類は森林の中では貴重な樹洞提供者ということになります。クマゲラの場合、クマゲラの巣をどういう動物が使っているのかと言いますとスズメバチ、オシドリ、ゴジュウカラ、モモンガなど私が確認できたのはこのくらいです。そこにある写真はちょっと巣穴から顔を覗かしていますがオシドリの雌です。先ほど、巣穴の大きさの話をしました縦が大きくても16mそれから横幅が10cmですからオシドリがこういう巣穴を繁殖に利用しますと出入りがやっとなんかということでもかなり無理をして出入りしているのが見られます。

これで終わります。どうもありがとうございました。

●「野幌森林公園のクマゲラを守ろう」富川 徹（野幌森林公園を守る会事務局長）

富川です。今までの講師の先生方のアカデミックなお話の後にやりづらいところですが、私からは野幌森林公園の報告を兼ねて「野幌森林公園のクマゲラを守ろう」ということでパワーポイントをつかって話します。

まずは、話の進め方として、①野幌森林公園について、②野幌森林公園を守る会の活動経緯、③クマゲラ一斉調査、④クマゲラの生息と環境問題、⑤クマゲラの保護保全にむけての概要について順に説明することで進めたく思います。（以下、映像により発表）

野幌森林公園は、昭和43年に北海道百年を記念して、野幌天然林の保護育成と自然に親しむ野外休養の場を目的に設定された道立自然公園です。野幌は平地林としての広大な面積(2051ha)をもつ都市近郊にある森として、世界に誇るウイーンの森、フォンテンブローの森と並んで貴重な森なのです。120年以前(明治21年頃)、関谷孫左衛門らが新潟県からこの野幌地方に入植し、生活のために農民が野幌の森の木を伐って建築材や薪材にしたということですが、その後は林業試験場の試験林創設とともに、開拓時に木を植えて保存に努めたことから今の森が残ったとされています。一方、野幌の土台となる土地は50~200万年前の洪積層で、約3万年前の支笏火山による地層です。どちらかという粘土の多い硬い土となっています。そのこともあってでしょうか、平成4年、16年の大きな台風によって、地層と根の浅い樹木に影響があり、特にトドマツ人工林が風によって多く倒されました。

私は若い頃から野幌森林公園について知ろうということで、いろいろと資料などを集めていました。このうち、この北海道野幌森林公園事務所(当時は北海道開拓記念館内)発行の「森へのいざない」や「野幌森林公園要覧」というのがあって、公園のことが分かりやすく書かれていました。まさに教科書



的な存在でしたが、これらを含めてその後出版された「野幌森林公園」(1999 村野)を引用して野幌の動植物について触れてみます。

野幌の植物は、温帯林と亜寒帯林の入り混じっていて、トドマツを主体とした針葉樹林、針葉樹と広葉樹が混じる針広混交林、カツラ・シナノキなどの広葉樹林が分布し、100種の樹木、600種を超える草本類がみられます。植物は約800種(在来665種、外来68種、外国樹種60種近く)で、またキノコなどの菌類では259種が確認されているとのこと。鳥類については154種が記録され、哺乳類20種、両生・は虫類10種、魚類11種。甲殻類2種、昆虫類1267種となっていて、国の天然記念物クマゲラをはじめとする多種多様な動植物が生息・生育する公園です。

ここで、クマゲラに注目して重要種カテゴリーをみると、このように国の天然記念物であることをはじめ、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保全に関する法律の国内野生動植物種、環境省のレッドデータブックの絶滅危惧Ⅱ類、北海道レッドデータブックの絶滅危急種などにランクされており、古くから重要な種類であると言われていました。

次に、野幌での動物などの書いてある自然調査の文献などを見てみます。まずはじめに、この「野幌国有林内の動物調査書」(1936 北海道林業試験場)は、野幌森林公園における最も古い動物書で、犬飼哲夫氏(北大名誉教授)が監修されていまして、腹足類、甲殻類をはじめいろいろな動物が扱われている中、鳥類については109種が掲載されています。以下、「野幌森林公園内に生息する鳥類調査報告書」(1971 札幌営林署)、野幌国有林内外の野生動物について(1976 北方自然保護研究所)、「森に生きる-野幌原生林と共に」(1982 井上元則)、「自然ガイド野幌森林公園」(1999 村野紀雄)などがあげられます。こうしてみると、野幌森林公園は豊かな動物の生息するシンボルとして調査・研究の場であったことがうかがえます。

私ども野幌森林公園を守る会の活動経緯についてお話します。野幌森林公園を守る会は、1983年(昭和58年)に北海道営林局(現北海道森林管理署)が行う天然林伐採等による生態系の破壊を憂慮する市民有志が集い発足しました。いつまでも自然度の高い貴重な平地天然林を保護しながら森林利用を模索し、一人でも多くの市民に野幌森林公園の自然のすばらしさを知ってもらえることを目的に多くの協力団体(約20団体)のもとに活動を続けました。残念ながら伐採については交渉の甲斐もなくある程度は伐られましたが、規模縮小などで大きな自然損失は避けられたことは唯一の救いともいえます。それから今日まで、クマゲラの生息が野幌森林公園の森の健全さを示すバロメーターと捉え、1987年(昭和62年)から、市民ボランティアによるクマゲラ一斉調査を継続して行っています。

調査参加者には、調査票やメッシュ地図をお配りして公園内に分散されての調査を行いました。参加者の少ない時にはクマゲラが出そうなエリアを対象にして何とか継続しています。そして、調査に参加された方々には調査結果の速報などをお届けしてきました。また、こうした調査が行われ機運が高まってきたところで、「クマゲラの棲める森を残そう!」というシンポジウムを行いました。1991年(平成3年)になりますが、実は今日お越しご参加の有澤先生、藤巻先生もこの26年前に講師としてお話をされています。あと当時秋田大学の小笠原先生も講師であり、この時に一緒に来られていた本日の講師藤井さんが今日は本州代表ということでのお話となりました。まさに26年ぶりのフォーラム(再シンポ)となったのです。

また、会として自慢できるのは、WWFの助成で「野幌森林公園ガイドマップやビデオ(野幌森林公園一のちを育む豊かな森を未来に-)」を作成したり、「クマゲラ-これまでの活動記録とクマゲラ一斉調



査」及び「野幌森林公園休養園地区鳥類調査（春季～夏季調査）報告書」などを手がけてきました。こうした活動の成果として、平成 17 年に前田一步園賞を受賞しました。

これまでのクマガラ一斉調査の経年結果ですが、調査スタート時には 5 羽とか 6 羽とかがありましたが、その後は 1～2 羽程度を推移しています。そして今日の調査では、まだ正式な数字ではありませんが 5～6 羽ということになります。これはとても意外で個人的

には良いことなのかどうなのかが分かりませんが少し驚いています。次にこれは、29 年分の目撃・鳴き声・痕跡の結果です。こうして見ると目撃・鳴き声は公園内の中央部で、痕跡はほぼ全域でということがいえると思います。これはデータですから、どこの場所で多く出ているとか色分けで表示も可能ですがここではあえて示していませんが、今日の 30 回のデータが得られたということは大変嬉しいことです。一方、近年のクマガラ情報として平成 14 年から 16 年 2 月までの観察記録になりますが、ほぼ毎日公園内を歩かれている「原始林かけまわり隊」の情報提供などから先のメッシュ図に示してみました。これによると、北の遊歩道のあるところではどこでもみられ、南の遊歩道の少ないところは限られての結果が読みとれます。しかし、公園内全域を利用していることがうかがえます。

昨年は久しぶりに営巣が確認されましたので、映像でご紹介しますが、4 月ではオスメスで巣作り作業、そしてその後は雛 2 羽（実際には 3 羽）の雛に餌を与えるオスなどの映像が撮れました。また、事情はわかりませんが営巣後半ではメスの個体が確認できずに、育雛にあたってはオスだけで行われていました。

野幌森林公園は面積的にも生息個体数に限界があるのではないかと考えます。これまでの調査でも 1～2 羽程度であったのが今日の 6～7 羽というのがあり、この数字が言い悪いは分かりませんが実際嬉しいところで可能な限り維持したい。このように、今後クマガラを守っていくためには、個体数を減らさない、環境を壊さない、むやみに近づかない、を徹底させたい。また、野幌はカメラマンが多く訪れるところであり問題も多いところです。こうしたことでは、同様な問題を抱える藻岩や小樽などの他地域の営巣事情を含め観察マナーとルール作りの確立が必要であると考えています。（映像をみながら）「クマガラがいるよ、フクロウがいるよ」となると本州などからもカメラマンが野幌に押し寄せます。林道にはクルマが並び、草木が押し倒されて巣の周りにはレンズの砲列が敷かれ、繁殖活動への影響が及ぶことになります。中には終日居る人もいてベンチで新聞をみたりお弁当を食べたりとあきれかえります。そうゆうことから、守る会ではクマガラ営巣木の保護のために北海道森林管理署さんに看板や周囲のローピングをお願いするなどの活動を行っています。

最後にクマガラの保護保全に向けてということでもとめます。先の藤巻先生のお話でも触れていましたが、私はクマガラはキーストーン種であると思います。クマガラが開けた営巣木、ねぐら木などは多くの森林性の鳥類や小哺乳類などが利用します。穴がなければ生きられない動物もいるのではないのでしょうか。キーストーン種は、石垣ブロックなどの大事なところの石がなくなる（抜ける）と一気に崩れてしまうという意味になりますが、まさにクマガラは森の生物多様性を保持していくうえで重要な存在であります。

一方、クマゲラに対する考え方や扱い方では、本種は天然記念物の指定やレッドデータブックなどの重要種であり、クマゲラ生息森林の取扱方針（北海道森林管理局）で保全の対象種に上がってはいますが、個人的には具体的な取り組みについてよく見えていないと感じます。加えて、先ほどの26年前のシンポジウムですが、当時からクマゲラは関心の高い鳥でありながらも分布や生息数、生態等の詳しい研究例は多くはありませんでした。そして今、四半世紀を過ぎて考えるとそれほど大きく変わった印象はありません。確かに一部の生息情報や写真などから分かってきていることもありますが、この貴重なクマゲラのことについては分からないことが多々あります。私たちは未来に向けてクマゲラとどうつき合っていけばいいのでしょうか。そのためにも、生息環境の保全に向けて、「もっと調べよう、知ろう、語ろう」が重要です。あらためて、クマゲラ保護における取り組みの現状や課題を確認しつつ、生物多様性の確保の観点より望まれる方向を模索していく必要があり、行政を主体に団体・市民と一緒に行動しながら調査活動や情報の収集・整理を行えることができればと思っています。野幌から道内外に発信させたいと思っています。ご静聴ありがとうございました。

●パネルディスカッション

富川：これよりディスカッションに入ります。引き続き私がコーディネーターを務めさせていただきますがよろしくお願いたします。

ここでは、特別講演の藤井さんと有澤さん、そして報告の藤巻先生に当会会長の松山に入ってください、野幌のクマゲラをはじめとする道内外におけるクマゲラの生息の現状や課題など、若干講演の延長のお話になるかも知れませんが議論を進めたく思います。

まず、はじめにクマゲラの生息分布ということでお話を伺います。クマゲラは我が国では北海道と東北北部に生息しますが、生息分布からみて地域ごとに変化はあるのでしょうか。「最近見かけなくなった、よく見かけるようになったなど地域変化はあるのでしょうか」。今日の一斉調査では多く見られましたが、分布についてお話しされた藤巻先生からいかがでしょうか。

藤巻：環境省の繁殖分布をみると、この20年間では減っているように全体的には減っていると思います。ただ先ほど国有林の問題を取り上げましたが、1900年代はじめの調査を行ったと時の状況なので、最近国有林が変わってきておるので生息地の保全ということでは、かなり期待できるのではと思っています。

富川：それでは、東北ではいかがでしょうか。藤井先生お願いします。

藤井：本州は北東北を中心にクマゲラの調査を行っていますが、今後期待できるのは南東北三県です。あと、私もどう整理していいのかわからないのですが、愛媛県の宇和島からクマゲラの情報が入ってい



て、私の友人を送り込んで確かなのかどうかを調べています。確認した人は、インターネットなどの北海道のクマゲラをみて、まったくこれと同じものだと言っていて、何十年前前から自分の山に黒いキツツキがいると言っています。

富川：ありがとうございます。クマゲラの移動性を考えると、長距離移動はおそらく苦手であると思っています。先ほど藤井先生からブラキストン線のお話があったように、元々は本州にはいなかったと言われていたクマゲラが、既に江戸時代から東北にもいたというのですね。私ごとで恐縮ですが、鳥類標識調査（バンディング）を行う仲間から松前白神からクマゲラが海を渡って行ったということを聞いていまして、もう少しだけ、本州の分布事情から海峡を渡るクマゲラの話や交流があるのかななどについてお聞かせください。

藤井：本州の方でもその情報はいただいています。私が確かめたのはある著名な野鳥の生態写真を撮られる方に直接連絡をとらせていただきましたところ、又聞き之又聞きであると謝罪されていまして。今のところ、「クマゲラが渡ったという事実はない」と思っていますが、海外ではスウェーデンのボーンホルム島（本土から37km離れているデンマーク領）では、ひとつがいが渡って今では1,000個体となり、家系図までできているということです。そうした事実もあるので、北海道と本州の最短の距離（20km以内）を考えると渡れないわけがないという見方をする方もいます。これらについてはよく分かりませんが、ただ無いことを証明するのは有ることを証明することより難しいので、今後の課題だと思っています。



富川：ありがとうございます。分布ということでは藤巻先生の北海道の地図にないところが気にはなるところですが、そういう意味ではデータがまだまだ少ないのかなと思います。

次に個体数についてですが、今日の一斉調査では6~7羽という結果でしたが、野幌（経年データ）では相対的には大きな変化がないように思われます。むしろ近年の観察例から考えると増えている感もあります。分布とも関わるのですがこうしたデータは個体数のデータなどについて、特に文献なども少ないと思います。それでは個体数について現状についてのご意見やご感想などをお聞きしたいと思います。まず、守る会の会長（松山）はいかがですか。

松山：私は研究者ではありませんが、野幌のクマゲラに関して言うと、先ほど富川から発表のあった確認のあったメッシュ図の度合いの説明がありました。確かに最初から3年目むらいまでは5~7羽（グラフでは6羽で中間の数字である）で割と多く見られていましたが、その後は少なくなって1~2羽というのがしばらく続いてきました。細かくいうとここ2~3年くらいからこの森の近くに住んでいて非常に熱心にほぼ毎日、365日のうち360日くらい森に入って観察されている方が数名おられます。その方々の情報を随時提供していただく中で、クマゲラに遭遇する機会が増えたというふうに言われています。確か

に今日の結果をみても、そういうことがある程度言えるのではないかと思います。原因に関しては分かりませんが、10程前に台風があり大量の風倒木がでましたが、それによって虫が増え餌環境が良くなったのではないかとの説も考えられるのですが、事象的にまだ調べられていないのでそれだけが原因とは言い切れません。近年増えてきたところの原因は分からない。ただ、日常的に見ている人の頻度が飛躍的に増えていることなので、やはり状況的にはここ30年調べてきたことでは、上向いているということは間違いなく言えることに思いますし、この傾向が続いてくれれば、僕らとしてもとても嬉しいなと考えています。



富川：野幌についてクマゲラは減っていることはないと思うのですが、変化なしというよりはむしろ増えている。それはなぜなのか、ということですね。有澤先生、富良野ではいかがでしょうか。

有澤：富良野では、こんな立派な調査はただの一度もやっていませんが、私の長い経験から行きて減っているとは思いません。現状維持ではなかろうかと思います。大学演習林の周りを囲むように国有林がありますが、国有林の森林管理（施行）のやり方が大変穏やかになってきています。かつてのように、お金になるような木を切っていた傾向が強かったのですが、今はそういうことがなくなっています。また道有林も同じように穏やかな森の管理に変わってきました。また、松山さんが言った中にあったのですが、台風ですね、怖いです。あれで森林が相当に破壊され、一説によると30年に一度は覚悟しなければならぬ現象なのだとされます。この温暖化で異常気象がもっときつくなると、森林性の野生動物はちょっと棲みづらくなるのかな、との印象を個人的に持っています。

富川：ありがとうございました。もうお一方、藤巻先生はいかがでしょうか。

藤巻：生息数ですか。私は分布調査を行っているのですが、あの調査では生息数は把握できません。まあ見る感じでは有澤先生と同じ考えで、現状維持ではなかと考えています。ただ、台風で森林が壊れるとありましたが、国有林の伐採がかなり少なくなっているのが、環境として生息環境の面積としては増えていくのではないかと思います。

富川：そうですか？個人的には、まだしっくりこない点があるのですが…。続いて生態のことに移りたく思います。

クマゲラの一般的生態など、特に行動や繁殖については、有澤さんの幾つかの本や資料などで分かってきたことが多いのはいうまでもありませんが、繁殖期における行動様式が多いように伺えます。300haくらいがクマゲラの行動範囲と言われていますが実際はどうなのでしょう。

有澤：難しいですね、質問からはずれてしまいますが、クマゲラの行動圏についてはほとんど分かってないでしょう。先ほど津軽海峡を往来しているということが話されていましたが、むしろそういうことから詰めていったほうが、クマゲラの行動や保護において有効なものになってくるのだと思います。藤巻先生の分布図でもありましたが、利尻島においては、私も何度か観察していてクマゲラの生息密度が比較的高いところだと思います。北海道本土との距離も比較的近いので、海峡の往来を確認するなどでは一番良いところではないかと思っています。行動圏、移動範囲を調べるには、今のところでは、やはり足環による鳥類標識調査（バンディング）がいいのだと思いますが、手続きが面倒である、森の中での捕獲技術が難しい、またその後の追跡調査も非常に難しいということで、とてもやりにくい作業となります。特に雛の分散などについては、大変興味があるのだけど・・・。標識調査のベテランの人が育ってこないと成し遂げられない問題だと思います。ちょっとピントがはずれてしまいました、ごめんなさい。



富川：ありがとうございます。はい、藤巻先生どうぞ。

藤巻：生息に必要な最低面積ということによろしいですか。条件のよいところだと先ほどの300haというのがでていると思います。また個体差があって1000haくらいが必要な場合もあると思っています。それからフィンランドでは島がたくさんありますが、小さな島のいくつかを行動圏にしてクマゲラが生息しています。同じようなことがロシアの沿海地方の湿原（釧路湿原の何倍もある）では、0.5haなどの小さな林が散在しているのですが、そのいくつかの離れた林を行動圏にしてクマゲラが生息しています。だから日本とは条件が違いますので、日本のクマゲラがそのような生活ができるかは分からないが、そういった側面も持っていると思います。



富川：ありがとうございます。そうですね。なかなか難しいですね。

藤井：本州の方ですが、白神で繁殖したのを地図上にプロットしたところ、一番近かったのは直線で8km（半径4km）という数値がでています。それらをいろいろとつなげてみると正三角形ができます。さらに中点どうしをとってみると、やはりクマゲラの繁殖にとって良好な緩斜面がでてくるのですが、そういう場所についてはほとんど伐採された状況にあり、本州の場合は個体数が増えているということは全く感じられません。現状維持か、もしくは人的なオーバーユースによって秋田の森吉山や白神についても、従来の繁殖地や生息地が奪われているといった状況で、どんどんどんどんと奥地に追いやられています。私らが観察していて、現在確実に見られる個体数は数羽です。

富川：ありがとうございます。もっとクマゲラの生息の現状や課題、生態などについてなどを議論したいところですが、時間も少なくなってきました。それではここから、会場の皆さんからのご意見などを伺いながらの場に切り替えたいと思います。この先生にお話を聞きたい質問や、今日の話聞いてこんなふうに考えていったらいいのではないかと鋭い意見などをお願いします。なお、質問などをされます方は、お名前、所属をお話のうえ簡潔にお願いします。

笹森：苦小牧のことでお話がありましたので、読み上げさせていただきます。藤井博士に近著「日本のクマゲラ」に関してお尋ねいたします。「雛を嘴にくわえて捨てに行く繁殖活動初体験の雌親を偶然にも観察した」と記述がありますが、この初体験と断定された根拠をお教えてください。

藤井：スライドに出した雌のことだと思いますが、あの個体について地元で定期的に観察をされている井上さんからの情報です。本日ここにいらしているのだから、井上さんよろしいでしょうか。

山口：今のことですが、根拠が分かれば井上さんから言っていただければと思います。藤井さんが確認されたのではなく井上さんが確認されたという初めての繁殖活動であるとされた根拠が分かればすばらしいことだと思います。

井上：室蘭の井上です。当時私は苦小牧にいまして、その時に藤井先生がいらしていて、繁殖が初めてと伝わったと思っていますが、あの場所では初めての繁殖活動です。ここには2000年過ぎから通い毎年1~2カ所で繁殖活動を観察していました。あの時営巣木は神社の奥の池の方にあり、ご存じの方もいるかも知れませんが北大演習林の研究塔の前です。今は風倒でなくなりましたがその木で、3年(回)ほど繁殖していましたが記述のものはそのうちの第1回目のもので、個体の特徴としては、羽根の色が少し薄くなっていましたので、あの場所に出てきた個体は、もしかして2年目、3年目であり、何らかの要因で羽根の色が落ちたのでしょうか。私は専門家ではありませんので、私の判断ではあの場所で初めて繁殖をはじめたということ、そして羽根の色の特徴から初めてみる個体であったことを、一緒に観察していた方々とも話し合っていました。藤井先生にはそのようにお話をした記憶があります。

山口：今のお話ですと、その場所では初めてと受け止められます。神社とか奥とか観察塔とか、昔からありましたが、ある個体について初めてだということがなぜ分かるのかということです。

富川：ここでのテーマは、冒頭でもいいましたが、「道内外に生息するクマゲラの現状や課題などを踏まえてどう取り組み進めていかなければならないか」を考える場としています。今のお話は著書の内容のことであり個人的な見解だと思いますので、ここではふさわしい意見とは思えません。よって後ほど個人的にご対応いただければと思います。時間もないので次に進みます。

玉田：北海道の外郭機関にいる玉田といいます。私は2003年から江別に来てそれから野幌をみているのですが、2003年に台風がありその後しばらくカツラコースでクマゲラが全然出てなかったが、それまではいろんな人の話を聞いているといっぱいでいるということでした。台風の影響であるかは分かりま



せんが、しばらく見てなくてここ5~6年経って出始めている。今日の話のデータをみていると、「最近よくみるよね、増えたよね」という話がありますが、図をみると昔は多かったり、また少ない時期があったが増えている兆しがあります。今日の富川さんのどこでクマゲラが出たかという図をみましたが、29年分をまとめていますが、多かった時期、少なかった時期、また多くなった時期をフェーズで分けていくと、クマゲラがどう利用しているか分かってきて、もしかして森

の変化がそこから読み解ける可能性があるかな、と見ていました。分布のこともありますが、野幌の森をどうやって守るのかを考えると、ただクマゲラの総数をみるのではなく、どこを利用していたの、巣がどこにあったの、などを落としていくと、違うものが見えてくるのかな、と思います。

富川：貴重なアドバイスありがとうございます。おっしゃるとおりに思います。会としてはこれらのデータについて詳細なところまでまとめきれませんが、この30年のデータをみつつ、また関係の先生方の知見を得ながら整理したいと思っています。今回は平面的にここにいましたという表現に終わっていますが、クマゲラの保全などに結びつくデータベース化を目指したいと思っています。他にありますか。

川路：川路といいます。単純なことをお尋ねしたいのですが…。野幌森林公園のクマゲラは閉鎖的なのか、それとも他から飛んで来ることがあるのか。要するに増えてきた、減ってきたというのは、ここにいる個体の繁殖がうまくいって、雛の生存率がよくて少しずつ増やしていっているのか、他からの出入りがあって、いなくなったときに入ってくるのか、どうなのでしょう。

富川：そこはデータということでは押さえていませんし、まとめてもいません。しかし調査ではありませんが、秋に幼鳥と思われる個体が国道12号線を越えて移動飛翔したとか、登満別でも畑の上を南方向に飛んでいく姿をみたという情報があります。そうしたことがあるので、出入りは繰り返されていると個人的には思っています。よく分かっていないのが現状です。

川路：そうすると、野幌森林公園内の環境云々よりは周りの環境でうまく繁殖できて、雛がでて幼鳥がどこかに定着しなければならないので、それが多い時にこちらに来て増えているという現象となっている可能性もある訳ですね。

富川：そうですね。それらも考えられますね。そういうことでは、野幌でも営巣確認と同時に雛が確実に出たときに、そのような動向が分かるような調査が必要なのでしょうね。

難しいのですが、講師の方々ありませんでしょうか。

有澤：私の経験からですが、大体10年前後は生きています。ペアは変わりませんが、どちらかが落伍するまで。落伍したら個体数の多い富良野でも1~2年はペアリングできないことが多いです。でも、

自分の繁殖地は他には譲りません。大闘争（ケンカ）をしてまで守ります。そのうちに、相手を捜すのか、現れるのかは分かりませんがペアリングができて同じ場所で繁殖を続けます。営巣木は多少変わりますがそんなに長距離には移動していません。かなり決まった行動圏、なわばりをもっているようです。ですから、野幌森林公園の個体もかなり固定されたなわばりもっていて、それを続けているのではないかと思いますので、外（他）から入ってきて新しく野幌に割り込んで繁殖するということはなかなか難しい場所ではないかと思えます。

富川：ありがとうございます。せっかくの機会で時間があればもっと話したいのですが……。生息分布や個体数の情報を集め、今回のフォーラムを踏まえて、野幌はこうだが他の地域ではどうなのだろうか、また、先の出入りの状況が分からないなど、データがとれてないので、もっと調べて行かなければならないというのがクマゲラだと思っています。タンチョウやシマフクロウでは環境省などで力を入れて取り組んでいますが、クマゲラはされてはいないという問題があります。そういったデータや情報を集めて行こう、そしてどう取り組んでいけばよいのかをこの場の皆さんと話会いたかったところです。時間もなく、また途中議論もはずれたりして申し訳なく思っています。これで、30回の一斉調査を終えましたので先ほども言いましたがデータベース化を目指したいと思っています。また、機会がりましたまたこうした場を設けて話し合われるのがよいかと思っています。まとまりのない話で恐縮ですが、終わりたいと思います。

松山：本日はほんとうにありがとうございました。先ほどらいクマゲラの一番の天敵は人間だと、カメラマンのことがさんざんでき参りましたが、昨年営巣した場所に私も週末通い続けてカメラマンの多いことに驚きました。その中でひとつだけ好転といましようか、カメラマン同士が「森の中に入る（巣の近くに行く）のはやめよう」という動きがみられたことがとても嬉しかったです。そういうことを言い続けることによって少しずつ好転していく面もあるのだと思い、今後も活動を続けていきたいと思っています。また懲りずに来年も参加いただきたく思います。本日はありがとうございました。



富川：これをもちまして、「野幌森林公園クマゲラ一斉調査30回記念 クマゲラ一斉調査&クマゲラ・フォーラム」を閉会いたします。皆さまありがとうございました。

（おわり）

クマゲラー斉調査&クマゲラ・フォーラム アンケート調査結果

1. 調査内容

クマゲラー斉調査とクマゲラ・フォーラムの参加者から、今後の開催活動等に生かすことを目的に簡単なアンケート調査より感想や意見をいただきました。

アンケートは、参加者のうち、都合郵送及び手渡し可能な90人を対象に、一斉調査では参加回数、調査における存知の方法や感想・意見、またフォーラムでは、存知、講演内容の理解、パネルディスカッションの状況や感想・意見について聞きました（調査票 / アンケートにご協力願います！を参照）。

2. 調査結果

調査の結果、回答数は一斉調査が45（50.0%）、フォーラムが34（37.8%）であった。

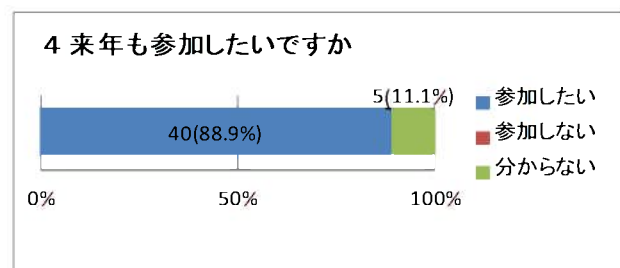
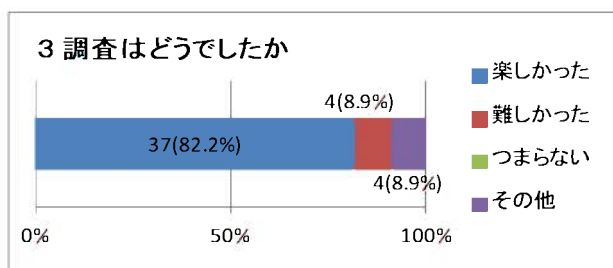
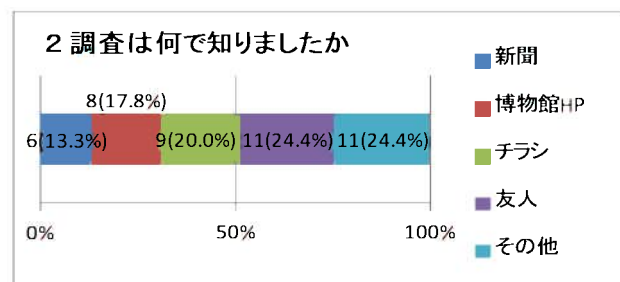
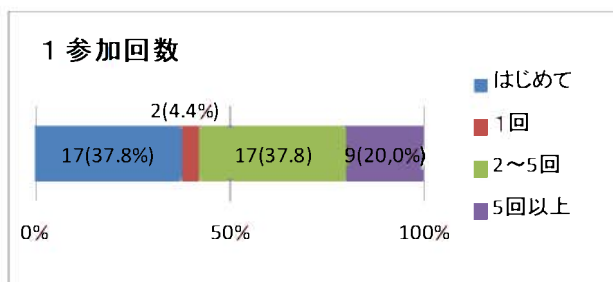
（1）クマゲラー斉調査

参加回数については、「はじめて」と「2～5回」が17件（37.8%）、次いで「5回以上」が9件（20.0%）、「1回」が2件（4.4%）であり、過年度調査に参加されている方が多かった。

調査の存知方法については、「友人」と「その他」が11件（24.4%）と同数、「チラシ」が9件（20.0%）、「博物館のホームページ」8件（17.0%）、「新聞」8件（13.3%）となった。友人や所属団体などからの周知が上げられ、情報源が比較的分かれた。

調査はどうであったかについては、「楽しかった」が37件（82.2%）と大半を占めた。あと「難しかった」と「その他」が4件（8.9%）であり、「つまらない」という回答はなかった。

来年の参加意思については、「参加したい」が40件（88.9%）と大半を占めた。また「分からない」が5件（11.1%）であった。「参加しない」はなかった。今後も継続して参加したいという結果であった。

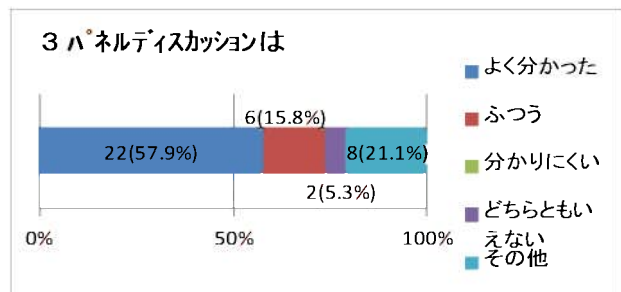
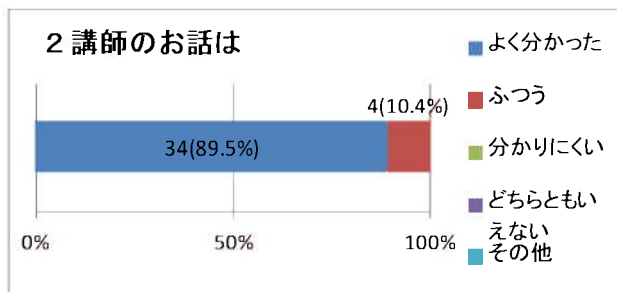
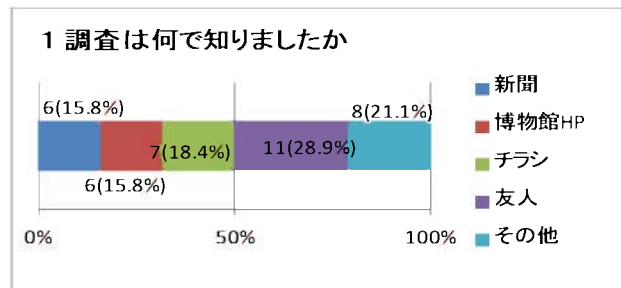


(2) クマゲラ・フォーラム

調査の存知方法については「友人」が11件(28.9%)、「その他」が8件(21.1%)、「チラシ」が7件(18.4%)、「博物館のホームページ」と「新聞」が6件(15.8%)であった。一斉調査とほぼ同様な傾向であった。

講演における講師のお話については、「よく分かった」が34件(89.5%)で大半を占め、「ふつう」が4件(10.5%)であった。「分かりにくい」、「どちらともいえない」、「その他」の回答はなかった。

パネルディスカッションでは、「よく分かった」が22件(57.9%)、次いで「その他」が8件(21.1%)、「ふつう」6件(15.8%)、「どちらともいえない」2件(5.3%)であった。「分かりにくい」はなかった。



3. まとめ

クマゲラ一斉調査では、過年度調査にも参加されている方が多く、また来年の参加意欲もうかがえた。また、全体としての意見では、普段は入れないところ(林内)に入れるという貴重な体験や開放感に満足したという印象であった他では、今後も調査を継続してほしいとの意見が多かった。

一方、調査に際し、「時間が足りない」、「説明が不足」、「メッシュ図の不備」、「終車場」、「新聞等の案内告知」などの問題提起もあり、調査における主催側へのあり方等や課題があり検討する必要がある。

クマゲラ・フォーラムでは、特に講演者には極めて良い印象を持っていたと同時に、話の内容についてもよく理解されたとうかがえた。

パネルディスカッションで、特別講演を含めて講演者が多く質問時間が短くなったこと、議事内容から的是はずれた質問のあったこと、一斉調査との連続で時間の長いことや都合により途中で退席する方がいたこと、などの開催における反省点も見受けられ、これらについても検討する必要がある。

一方、一斉調査のあとに講師を招いた講演会や勉強会があったらいいなどの建設的な意見や主催者への本企画に対する敬意などがあつた。

4. アンケート(記述部分)～その他の回答&感想・意見

(1) クマゲラ一斉調査

設問2ーその他(数字は件数)

・主催者から(3)、まんまる新聞(3)、日本野鳥の会(2)、平岡どんぐりの森(2)、本州産クマゲラ研究会、パンダクラブ北海道、野鳥お勉強会

設問3－その他

- ・なるべく可能性のある場所を選んで欲しい。
- ・今回は遊歩道に沿った調査、時間もかかった。
- ・観察する場所がよく分からなかった。

設問5－感想・意見（順不同、原文維持）

- ・普通は入れない森の中へ入ることができ、すごく良かった。そんなこともあり、時間が足りない。いつまでも大切な自然を残していきたい。神秘のクマゲラ世代を超えていつまでも。
- ・調査区画に近い大沢口を利用したが駐車場がすでに一般の利用客で混んでいて、車をとめるのが大変だった。もう少し時間が遅かったら調査開始時間に間に合わなかったと思う。大沢口は駐車場が広いだと思うので、警備員もしくは誘導する人など、係の人がいた方が良いと思う。
- ・調査の結果、多数確認できてよかった。私も何度が以前に見ることができた。エゾフクロウより見られるようになり嬉しい。両方ともたくさん確認できるといい。
- ・初参加、子供と自然散策も兼ねて貴重な体験をすることができた。いつか本物のクマゲラに出会えればよいと思う。鳥の鳴き声を聞き分けるのが難しかった。バードウォッチングのベテランの方と一緒に聞き分けもできるのかなと思った。
- ・調査班のリーダー教育が必要？
- ・たいへん意味ある活動なので、是非長く続けて継続して欲しい。
- ・その後、野幌森林公園にスノーシューをはいて3回行ってきたが確認はできず。
- ・また来年も参加するのでよろしくお願いいたします。
- ・クマゲラの見つけ方が少し分かった気がする。また是非参加したい。
- ・一斉調査は不慣れで道を勘違いしてしまい調査時間を短くしてしまった。最初からプロジェクター画面で幹線の説明があればと思った。
- ・クマゲラの写真をよく撮れている若いI君には今後も森との関わり持ち続けて欲しい。
- ・積雪が少なく足跡が見づらく戻れるのが不安であった。複数の調査員で行う方が不安なく正しい調査ができると思った。
- ・調査メッシュの地図の表示範囲を広くして欲しい（調査区域の周囲の地形、道路形状から調査範囲を正確に把握するため）。
- ・継続してのクマゲラ調査は大変貴重であると思う。クマゲラの数も安定して増加傾向ということで嬉しい。今年は東部緑地や平岡公園、里塚緑ガ丘新道付近でもクマゲラが採餌している様子を目撃した。
- ・今年は市内各所でクマゲラを目撃することが多いと思う。野幌でもそうですが理由はあるのか。
- ・普段は入れないところを歩いての調査はいつも新鮮で楽しみ。数も増えているとの事嬉しく思う。調査で会える事を期待してまた参加させていただきたい。馴れた方が一緒にないと目印のないところをあるくのはなかなか難しい。
- ・友人について歩いたので自分のいる場所がよく分からなかった。他人まかせを反省している。あとから直ぐ隣りの区域でクマゲラが観察された事が分かりちょっと残念だった。
- ・1時間という制限が調べる広さに合っているのか。時間が足りなかった、指示された場所の把握がよく分からなかった。しかし、1人ではなく仲間とできることは心強い。

- ・初回だったので割り当てられたメッシュと言われても基点も分からず困惑した。地図では道路が分かりにくい。メッシュが近い人の班のようなものできていれば教え合うこともできる。意外と離ればなれにサーベイするのでここで良いのか不安なところがあった。
- ・都市に近い公園にクマゲラが生息しているとは驚きです。
- ・一斉調査の時間を1時間でなくもう少し長くしてはどうか。
- ・500mメッシュ内の地形の把握が不十分で移動に時間がかかり、調査範囲の一部しか回れなかった。30回記念のため、前段の挨拶が多すぎ調査時間が短くなったように思う。
- ・調査エリアが事前に決まっていた今年はずいぶんスムーズに動けた。ただ、自分で好きな場所が選べなくてとまどっている人もいたように感じた。
- ・クマゲラには残園ながら遭遇することができなかったが、他の野鳥が降り出した雪を避けるように集まってきたので思いもよらぬ楽しみがあった。エリアの特定が難しかったが2回目だったので事前に範囲をイメージできたのはよかった。今回初めての方がどんなふうに調査するのかイメージできていないようだったので具体的な調査方法（時間内の動き）の例など話してもらえると現地で戸惑うことがないのでと思った。
- ・真新しい食痕の跡を見つけ感動した。この前後でも数度姿を見、確実に増えていることを感じた。4月14日10時ごろ、去年の営巣木にクマゲラのオスが入るのを確認、近くに1羽おり鳴いていたが、メスの確認はできなかった。
- ・中央線沿線の区画を担当したが、車の乗り入れができないということで、スキーで移動したが他の人は車で移動して移動していた。可能なら車の乗り入れで調整してはどうか。それと区画ごとの移動方法等の案内は個別に記入しておいて欲しい。
- ・参加者がもっと多ければもっと多くの発見ができるのかも知れないが、ストレスを与えるのも問題なので難しい。
- ・〇〇メッシュでしたが、スギ林があるのは知らなかった。この辺りのカラマツの食痕が多いので少し驚いた。
- ・初めて参加したとき、クマゲラに出会えた。鳥仲間からはビギナーズ・ラックと冷やかされ、それ以来、都合がつく限り調査に参加させていただいている。野幌は年に何回も花の観察に訪れるが、不思議とクマゲラとは縁がない。来年に期待！
- ・初めての参加で不安だったが、知人もいて調査地が近かったため、同乗して現地に向かった。調査地への名入口は駐車スペースも狭いので、便乗を各自の責任をもってということでも進めても良いかと思う。
- ・北海道博物館との共催は永く続けるうえで良いことと思う。
- ・残雪を踏みしめながらの調査だったが、野幌森林公園の静けさに小鳥の鳴きしきる声を楽しみながらの行動でもあった。
- ・新聞の告知は遅すぎ、友人に聞かなければ調査&フォーラムがあることを知らなかったと思う、参加者には通知してほしい。全てのメッシュに人をはり付けられたのでは？
- ・なかなか冬の官許言うになじまないメッシュが小さな地図では分かりづらいと思う。この時だけ、一定の場所に雪上にポールをたてては？

(2) クマゲラ・フォーラム

設問2－その他（数字は件数）

- ・主催者から（3）、平岡どんぐりの森（2）、日本野鳥の会、まんまる新聞、本州産クマゲラ研究会、野鳥お勉強会

設問3－その他（数字は件数）

- ・用事があつて聞くことができなかった（6）
- ・今年も調査のお手伝いできて満足している。

設問4－意見・感想（順不同、原文維持）

- ・参加できず残念。次回は是非。
- ・調査後の講演プログラムがセットされていると楽しい。
- ・あまり専門的にならない方が良いのでは。
- ・クマゲラのいろいろな話が聞けて良かった。
- ・特にA先生のお話が非常に参考になり、かつ楽しかった。もう一度このような機会があれば嬉しい。「クマゲラの森から」の本は読ませていただく。
- ・森林公園内のクマゲラの遷移を知ることができてためになった。今年は増えたがその理由も知りたい。
- ・クマゲラの第一人者の話を聞くことができとても面白く聞くことができた。A先生のお話は調査現場の事を話され面白かった。
- ・クマゲラ研究の日本の第一人者の方々の話は30回記念にピッタリの講師だった。
- ・クマゲラの生態（アリを主食とすること、蟻酸を中和する分泌線をもっていること等）に理解を深めることができた。自然保護の観点から難しい面もあると思うが、野幌森林公園内の分布の傾向、年次別推移についてもう少し詳しく話が聞きたかった。一斉調査に限らず、日常の観察情報を収集するとより生態を把握できると思う（例：ウトナイ湖のワカサギ情報報告箱）
- ・朝の調査からの参加では長時間になるので、土・日と分けるのが参加しやすいのでは。
- ・時間が長いため最後までは無理だった。調査と別にさせていただいたほうが良かったかも。
- ・クマゲラ研究の第一人者のAさんのお話が聞けてとても良かった。ずっと直立してお話で座って聞いているのが申し訳なく感じた。
- ・諸講師の先生のお話は面白く興味深かった。
- ・パネルディスカッションでは、会場からのはずれの質問があったことは残念だった。
- ・第一線の講師の方々のお話は大変興味深かった。質疑応答の時間がもっとあった方が良かったと思う。
- ・年1回のクマゲラ調査の後に、このような講師を招いた講演会が毎回あればとてもいいと思う。講師は1人にかまわないので、みんなのためになる話が聞きたい。
- ・途中で帰ったので全体を把握していないが、他の地域のことより野幌森林公園のクマゲラの話の先に聞きたかった。
- ・フロアからの質問はちょっと残念な感じ。
- ・道外の方々の活動の様子がよく分かり勉強になり、身近にある森林公園の重要性が増した。大切にしたい。

- ・野幌森林公園の保護に役立つなら今後も続けてやっていきたい。
- ・初めての参加、クマゲラについての知識が増え大変有意義な一日であった。ありがとう。
- ・クマゲラが増えているのは嬉しい限り。カメラをかかえた人たちが何より心配。
- ・クマゲラ研究の3人スター総出演でそれぞれのお方の味わい深いお話を聴くことができ大変嬉しかった。企画された関係者に深謝申し上げる。
- ・貴重なお話を伺うことができ大変感謝している。今回のフォーラムの内容を所属のガイドボランティア研修で披露させていただいた。機会があれば、このようなフォーラムに参加させていただきたい。
- ・A氏のお話はよかった。
- ・意見交換では特に建設的な話の時間が少なかった。また講演者が4人もいて時間が足りないという感じ。フロア発言は潜在的に多かったようなので消化不良の感があった。大変貴重な場の企画をありがとう。節目節目で今回のようなことがあると研究や調査で得られた知見を得ることができ大いにためになる。何十年も活動されておられることに敬意を表し深謝する。
- ・秋田などのクマゲラ多数生息地ともっと交流したい。フォーラム後に懇親会は行えないものだろうか？

アンケートにご協力願います！

クマゲラー斉調査とクマゲラ・フォーラムに参加いただいた皆さんからのご感想やご意見をいただき、今後の調査の活動に反映させたいと思っています。

つきましては、以下アンケートにお答えいただき、返信封筒をご利用のうえ4月22日(金)までにお送り願います。ご協力よろしくお願いいたします。

●クマゲラー斉調査（参加された方）

1 参加回数：（はじめて・_____回目）

2 調査は何で知りましたか：新聞など・博物館のホームページ・チラシ・友人から
その他（_____）

3 調査はどうでしたか：（楽しかった・難しかった・つまらなかった・その他）
その他（_____）

4 来年も参加したいですか：参加したい・参加しない・分からない

5 ご意見・ご感想：

●クマゲラフォーラム

1 調査は何で知りましたか：新聞など・博物館のホームページ・チラシ・友人から
その他（_____）

2 講師のお話は：よく分かった・ふつう・分かりにくい・どちらともいえない
その他（_____）

3 パネルディスカッションは：よく分かった・ふつう・分かりにくい・どちらともいえない・その他
（_____）

4 ご意見・ご感想：

〈提出先〉

野幌森林公園を守る会 事務局

〒069-0835 江別市文京台南町 47-31 富川 徹 宅

Eメール：tom5@ruby.ocn.ne.jp 電話：090-4874-1705

資 料

- ・ 開催プログラム
- ・ 申し込み案内
- ・ 新聞記事

野幌森林公園クマゲラー斉調査 30回記念

クマゲラー斉調査 & クマゲラ・フォーラム プログラム



日時： 2016年3月12日（土）

【クマゲラー斉調査】 8:45～12:00

【クマゲラ・フォーラム】 13:30～17:00

場所： ○北海道博物館講堂

札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 電話：011-898-0466

○野幌森林公園内

主催： 野幌森林公園を守る会

共催： 北海道博物館 / 野鳥お勉強会

協賛： 北海道新聞野生生物基金

協力： 北海道野鳥愛護会 / NPO 法人本州産クマゲラ研究会

プログラム

【第1部】クマゲラー斉調査 (9:00~12:00)

8:45 集合
9:00~ 開会・挨拶・調査説明
9:40~12:00 調査
12:00 調査終了

【第2部】クマゲラ・フォーラム (13:30~17:00)

13:30~ 開会・一斉調査結果速報発表

○特別講演

13:40~14:25 講演1 「本州産クマゲラ研究小史」

藤井 忠志 氏

(岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、

NP0法人本州産クマゲラ研究会理事長)

14:30~15:10 講演2 「クマゲラと生きる」

有澤 浩 氏

(元東京大学北海道演習林助手、森林生物研究所所長)

15:10~15:20 (休憩)

○パネルディスカッション

15:20~15:40 報告1 「クマゲラの生物学」

藤巻 裕蔵 氏 (帯広畜産大学名誉教授)

15:40~16:00 報告2 「野幌森林公園のクマゲラを守ろう」

富川 徹 (野幌森林公園を守る会事務局長)

16:10~17:00 ディスカッション

17:00 閉会

クマゲラの生き続ける豊かな森を未来へ

野幌森林公園を守る会 会長 松山 潤

野幌森林公園に生息する天然記念物クマゲラの数、市民ボランティアの参加で調べようという調査も今年で30回目を迎えることとなりました。こんなに長く続けられたのも、野幌の森を愛し、クマゲラを愛して、参加し支援して下さる多くの方々のお陰と深く感謝いたします。

□ クマゲラは生物多様性の森のシンボル

クマゲラは本州の一部と北海道に生息する日本最大のキツツキです。繁殖には営巢の為に、太くまっすぐ伸びる大きな木が必要です。好物のアリなどの餌を採るためには、老木や枯れた木・倒木などが必要です。又、次の世代の森を支える若い木も順調に育って来なければなりません。クマゲラはこのような種々の世代の木がバランス良く整った豊かな森にしか生息できません。私たちは、クマゲラを豊かな森のシンボルとしてとらえ調査活動を続けています。

□ 野幌のクマゲラは増えて来ているか

近年、野幌の森でクマゲラを目にする機会が増えているという情報があります。毎日のように森に入って調べてくれている熱心な人の情報では、ここ2~3年、クマゲラと遭遇する確率が飛躍的に増加しているということです。本当に増えているのかどうかフォーラムの中で皆さんで検討してみたいと考えています。

□ 日本のクマゲラの現状と未来を考えよう

本日は、日本を代表するクマゲラ研究者の方々が集まってくれました。全道のクマゲラを長年研究される藤巻先生、東大富良野演習林で長年調査研究を続けられる有澤先生、本州のクマゲラ研究の第一人者藤井先生です。この機会に、日本におけるクマゲラの現状や問題点、将来に向けての保護対策など、貴重なご意見を頂くとともに、皆で意見を交換し考えていきたいと思えます。

本日は、クマゲラ・フォーラムにご参加いただき誠にありがとうございました。

また、本講演は北海道新聞野生生物基金の助成を受けて開催するものであり、ここに心よりお礼と感謝を申し上げます。

本州産クマゲラ研究小史

藤井 忠志

(岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、NPO法人本州産クマゲラ研究会理事長)

1975年(昭和50年)9月19日、ひとりの青年が秋田県森吉山のブナ伐採地で500ミリの望遠レンズを抱えて、へたりこんでいました。そしてはるか前方へ真っ黒い鳥がゆっくりとはばたいて森の中へ消えていくのをぼんやりと眺めていたのです。「よく生きていたな!」これは筆者の師匠で大学の先輩でもある故・泉祐一氏が本州で初めてクマゲラの撮影に成功したときの回想文です。

今でこそ、クマゲラの名前は世間に知られていますが、当時は北海道に生息する鳥で、「本州には生息しない幻の鳥」と思われていました。明治初期、函館で貿易商を営んでいたトーマス・ライト・ブラキストン(右図)は、日本産鳥類のコレクターでもあり、そのコレクション4~5千点から北海道と本州の分布の違いを根拠に、「津軽海峡は疑いもなく動物分布上の境界線であった」という異色の学説を発表したのです。このとき討論にたった当時の工部大学教授のジョン・ミルンはこの説を強く支持し、津軽海峡を動物地理学上『ブラキストン線』と呼ぶことを提案したのです。以来、日本のクマゲラは Thomas Wright Blakiston



(北海道大学植物園・博物館所蔵)

北海道に生息するキツツキという位置づけになったのです。

従って、泉氏の発見以前の1934年(昭和9年)に、川口孫治郎という鳥類学者が八幡平国有林で2羽のクマゲラを捕獲した際にも、クマゲラはたまたま北海道からやってきた『渡り鳥』という扱いにされていたのです。

しかしよくよく調べてみると、伊達家所蔵の古文書『観文禽譜』の中に、クマゲラの解説文と雌の模写絵までが描かれていたのです。その添文の内容は、仙台はもとより、会津、日光にまでクマゲラが生息していたというものでした。江戸時代、既にクマゲラは本州の森の中で生息し、平成の今日まで細々とその種を維持し続けてきたことを物語っています。

クマゲラと生きる

有澤 浩

(元東京大学北海道演習林助手、森林生物研究所所長)

「クマゲラと森林のかかわり」をテーマとし調査研究を開始。当時クマゲラに関する国内の文献は極めて乏しく、手探り状態であった。クマゲラとの出会いを求めて森林を歩くが3年間は成果なしであった。

4年目の冬、繁殖期に鳴くエゾシカの声に似た声を耳にし接近を試み、初めてクマゲラに遭遇した。造巢行動、育雛状況、ねぐら木の確認、冬季の採餌行動などを確認するまでに13年を要した。

クマゲラは天然林内の下枝の高い通直に伸びた大木（胸高直径40cm）に造巢する。しかもそのほとんど
早坂泰夫撮影 2015. 4. 8 大沢コース



が木肌の滑らかな樹種が選択されている。トドマツ、シラカンバ、ウダイカンバ、ドロノキ、ヤマナラシ等の生木と、樹種は問わないがすでに樹皮が剥落した枯れ木がそれであった。これらの条件は育雛期の天敵と考えられるアオダイショウやエゾクロテンなどの登攀を避けるためのようと思われる。

造巢、育雛はつがいによって行われ、完成および巣立ちまでに、それぞれほぼ1ヵ月を要している。ただし完成させた巣は4～5年続けて使用することが多い。

クマゲラは個体ごとにねぐらを持っている。つがい相手はもちろん、雛にさえ使用させない。ねぐらとして利用する樹木は広葉樹の大木で、シナノキ類が多く、ほとんどの場合樹幹内部が空洞化したものである。ねぐら木には1mほどの間隔で複数の出入り口が開けられていることが多いが、これは非常口的な意味合いがあるように思われる。エゾクロテンとのトラブルを観察してその感を強くしている。

クマゲラはヤマアリなどのアリ類や甲虫の幼虫を主な餌としている。植物質はあまり餌とはしていない。非繁殖期は林内の朽ちた倒木や切り株から採餌しているが、積雪期になるとこれらが埋もれてしまうので、枯れ木や生きた木の幹に穴を穿ち、樹幹内部に潜むアリやカミキリの幼虫を掘り当て採餌する。その掘り跡は円形、長方形（縦形）とさまざまだが長方形が圧倒的に多い。採餌位置は雪上2～3mに集中している。したがって採餌された樹木の周りには掘り屑（木片）が大量に残されている。対象とされる木の太さは胸高直径30cm以上である。エゾマツ、トドマツは欠かせない存在として重要である。

クマゲラにとって天然林は欠かせない。通直な大木、内部が空洞化した広葉樹、冬季の採餌源としての大木などが随所に存在する森林こそクマゲラの理想的な生息環境なのである。

クマゲラの生物学

藤巻裕蔵

(帯広畜産大学名誉教授)

クマゲラは大型のキツツキの1種で、キタタキが絶滅した現在では日本で唯一最大のキツツキである。東はカムチャツカから西はヨーロッパまで旧世界の森林帯に広く生息し、日本では東北地方部と北海道に生息する。森林性鳥類ではあるが、繁殖期に生息するのは常緑針葉樹林、針広混交林、落葉広葉樹林といった天然林で、ハイマツ林やカラマツ人工林にはいない。冬には行動圏が広がり、市街地や農耕地内の林に飛来することがある。

営巣木の樹種は、トドマツ、アカエゾマツ、ヤマモミジ、イタヤ、オヒョウ、ミズナラ、ハリギリ、シラカンバ、ダケカンバ、ケヤマハンノキ、アサダ、カツラ、シナ、ドロノキであった。地上からの巣の高さは平均7.8m、巣出入口は長径10-16cm、短径7~10cm、巣孔の横径17~27cm、縦径44~60cmであった。

5月中旬に産卵し、抱卵期間14~16日、育雛期間31~32日で、道南では6月20日頃、道央では6月20~25日、道東や高標高地では6月25~7月上旬に巣立つ。雌雄交替で抱卵するが、夜間は雄が抱卵するので、抱卵分担は雄で2/3、雌で1/3である。育雛期には雌雄が給餌する。前期にはほぼ全日雌雄交替で雛を暖めるが、中期には夜間だけ暖め、後期には雛を暖めることない。

食物はおもにアリ類で、生立木でも幹に穴を開けてアリを取り出したり、倒木や地上でも採餌する。

クマゲラは同じ巣を数年間使うことがあるが、古巣は他の動物にも巣や隠れ場所として使われ、クマゲラは重要な「樹洞」提供者ともなっている。



早坂泰夫撮影 2015. 2. 12 志文別線

野幌森林公園のクマゲラを守ろう

富川 徹・松山 潤・早坂泰夫・松原寛直
(野幌森林公園を守る会)

野幌森林公園は、札幌市、江別市、北広島市に囲まれた約 2000 ヘクタールの平地林である。北海道開拓以前の自然がかろうじて残存する森林空間には、国の天然記念物のクマゲラをはじめとする多種多様な動植物が生息・生育している。

野幌森林公園を守る会は、1983 年（昭和 58 年）に北海道営林局（現北海道森林管理署）が行う天然林伐採等による生態系の破壊を憂慮する市民有志が集い誕生した。いつまでも自然度の高い貴重な平地天然林を保護しながら森林利用を模索し、一人でも多くの市民に野幌森林公園の自然のすばらしさを知っていただけることを目的に活動を続けている。当初問題であった伐採については、残念ながら交渉の甲斐もなくある程度は伐られたが、規模縮小や残存木の確保では大きな自然損失は避けられた。その後は森の公益的機能を重んじた環境教育等の実践を通じながら、徐々に国有林行政からも理解が得られるようになり、野幌森林公園はその後国有林伐採の対象林にはなっていない。

私たちは、クマゲラの生息が野幌森林公園の森の健全さを示すバロメーターと捉え、1987 年（昭和 62 年）から、市民ボランティアによるクマゲラ一斉調査を継続して行っている。参加市民らがそれぞれに与えられた 500m×500m 区画（全 108 メッシュ）で一定時間の調査を行い、その確認結果の情報から本種の生息確認と個体数を推計するというものである。これまでの結果は概略的にまとめており、初回の 5~6 羽と、3 回目の 6~7 羽の最大羽数を記録した以降は、平均 2~3 羽程度で推移している。

クマゲラは、バードウォッチャーやカメラマンの人気が高く、とりわけ野幌森林公園は札幌からも近いこと、加えて近年のカメラブームも相俟って本種の繁殖期には多くのカメラマンが訪れるようになった。遊歩道近くにクマゲラの営巣木があるものなら、レンズの砲列が敷かれ、繁殖活動への影響が及ぶことになる。2010 年（平成 22 年）には、大沢園地近くの営巣木の保護のため森林管理署に看板や周囲のローピングを依頼し、相互に監視中であるにも関わらず、カメラ圧などから残念にも繁殖は失敗に終わった。

一方、昨今は連日のように森の中を散策しバードウォッチングなど野鳥や自然に関心を持たれる方々も増えている。そうした方々からの有益な情報もあって、去年は久しぶりに遊歩道には近いものの、クマゲラの繁殖個体と営巣木を確認できた。早速、森林管理署への保護対策のお願いを申し入れ、その配慮もあって久しい繁殖成功を関係者一同喜んだ。

大都市近郊の野幌森林公園にクマゲラが継続して生息していることは極めて意義深いことであり、私たちはいつまでもクマゲラの棲める環境を後世に残していきたいと考える。こうした現状を踏まえ、道内外における本種の生息状況の把握とともに、クマゲラの生息環境の保全に結びつけていければと願っている。

講師プロフィール

藤井 忠志 (ふじい ただし)



1955年秋田県大館市生まれ。岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長。NPO法人本州産クマゲラ研究会理事長。岩手県内の中学校教員を経て、現職。1985年から本格的に本州に生息するクマゲラ個体群の生息・生態調査・研究に取り組む。2015年岩手県立博物館にて「クマゲラの世界」展を開催。主著「日本のクマゲラ」北海道大学出版会、「ブナの森から」本の森、「北東北のクマゲラ」東奥日報社など。

有澤 浩 (ありさわ ひろし)



1936年富良野市生まれ。1955年東京大学農学部北海道演習林勤務。森林動物研究室所属。1970年東京大学農学部助手。クマゲラ生態学に専念。1997年定年退官。主著「クマゲラの森から」、「生けるもののふるさと森林」など。「北海道文化財保護功労賞」、「環境大臣賞」など受賞。

藤巻裕蔵 (ふじまき ゆうぞう)



1938年東京都生まれ。1966年3月北海道大学大学院農学研究科博士課程修了後、北海道立林業試験場研究職員。1975年より帯広畜産大学。助教授、教授を経て2002年3月帯広畜産大学を定年退職。日本の鳥類学者、主著「北海道鳥類目録(極東鳥類研究会)」、論文「北海道におけるエゾライチョウの食性」ほか多数。帯広畜産大学名誉教授、山階鳥類研究所特任研究員。

富川 徹 (とみかわ とおる)



1953年旭川市生まれ。江別市在住。たくぎん総合研究所環境調査部を経て、99年から(株)野生生物総合研究所に勤務、鳥類・環境保全及び環境管理計画業務等を担当。現場第一をモットーに取り組むことを心がけている。鳥類標識調査員、日本鳥学会会員、北海道野鳥愛護会副会長、野鳥お勉強会代表など。

----- Memorandum

野幌森林公園クマゲラー斉調査 30 回記念
クマゲラー斉調査 & クマゲラ・フォーラム

発行日 2016. 3. 12

発行人 野幌森林公園を守る会

このクマゲラー斉調査は、北海道博物館の研究プロジェクト「野幌森林公園の生物インベントリー調査」による市民参加型調査を兼ねて実施します。クマゲラ・フォーラムは、同プロジェクトによる公開研究会を兼ねて開催します。

野幌森林公園クマゲラー斉調査 30回記念

クマゲラー斉調査 & クマゲラ・フォーラム



1. 開催趣旨

天然記念物・クマゲラは、北海道と本州北部のみに生息する、日本最大のキツツキです。野幌森林公園を守る会では、会の設立以来、大都市札幌近郊の野幌森林公園でクマゲラの棲める自然を残そうと、市民ボランティアによる年1回のクマゲラー斉調査を続けてきました。この一斉調査も今年度でちょうど第30回目を迎えることになり、これを記念して、調査に合わせて「クマゲラ・フォーラム」を開催します。

このフォーラムでは、北海道に比べて情報が少ない本州のクマゲラの研究史や、道内のクマゲラの生態などについて、それぞれの第一人者にお話しいただくことで、野幌森林公園をはじめとする日本のクマゲラの過去を振り返り、置かれた現状や課題を確認し、未来に向けて私たちがクマゲラとどうつき合っていけばいいのかなどについて考える機会にしたいと思います。



2. 主催

野幌森林公園を守る会

3. 共催

北海道博物館／野鳥お勉強会

4. 協賛

北海道新聞野生生物基金

5. 協力

北海道野鳥愛護会／NPO法人本州産クマゲラ研究会

6. 日時

2016年3月12日（土） 【一斉調査】 8:45～12:00 【フォーラム】 13:30～17:00



7. 場所

○北海道博物館講堂（一斉調査集合場所・フォーラム会場）

札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 電話：011-898-0466

○野幌森林公園内（一斉調査）



8. プログラム

【第1部】クマゲラー一斉調査（9:00～12:00）

8:45 集合（遅れずにお集まりください）

9:00 ～ 開会・挨拶・調査説明

9:40 ～12:00 調査

12:00 調査終了、博物館へ帰着



【第2部】クマゲラ・フォーラム（13:30～17:00）

13:30 ～ 一斉調査結果速報発表、挨拶

○特別講演

13:40 ～14:25 講演1「本州産クマゲラ研究小史」

藤井忠志氏

（岩手県立博物館首席専門学芸員兼学芸部長、

NPO法人本州産クマゲラ研究会理事長）

14:30 ～15:10 講演2「クマゲラと生きる」

有澤浩氏（元東京大学北海道演習林助手、森林生物研究所所長）

15:10 ～15:20 （休憩）

○パネルディスカッション

15:20 ～15:40 報告1「クマゲラの生物学」

藤巻裕蔵氏（帯広畜産大学名誉教授）

15:40 ～16:00 報告2「野幌森林公園のクマゲラを守ろう」

富川徹（野幌森林公園を守る会事務局長）

16:10 ～17:00 ディスカッション

17:00 閉会

9. お問い合わせ

北海道博物館 011-898-0466

（担当：社会貢献グループ）

10. 詳細と申込方法

【第1部】クマゲラー斉調査

(1) 調査方法

野幌森林公園内を500m×500mのメッシュ（ます目）に区切り、それぞれのメッシュに調査員を配置して同時に一定時間観察し、確認できたクマゲラの性別や行動などを記録することで、野幌森林公園エリア全体のクマゲラ生息数を推測します。

(2) ご注意

- ・調査そのものは初心者でもできますが、積雪期の森林内を、遊歩道以外も含めて各自、自力で歩くことになりますので、ご自身の体力・技術などを考慮の上、ご参加ください。
- ・中学生以下だけの参加はできません。保護者の方と一緒にご参加ください。
- ・事前に調査エリアの振り分けをしますので、ご家族やグループでの参加の場合、必ず1通にまとめてお申し込みください。（別々に申し込まれますと、調査エリアが離れた場所になる場合もあります。）
- ・自家用車でご参加の方は、調査地最寄りの入口まで自家用車で移動していただきます。
- ・調査エリアの振り分けは、自家用車の有無、スキーやカンジキの有無、技術や体力などにより、事務局で判断させていただきます。ご希望に添えない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
- ・調査中は、道迷いや怪我などがないよう、くれぐれもお気をつけて行動してください。
- ・主催者で参加者を対象としたレクリエーション保険に加入します。保険料として100円の実費をご負担ください（高校生以下は無料です）。

(3) 服装・装備・持ち物

昼食（調査中に林内で食べることも考えられます） 筆記用具

防寒着（野外用の暖かく動きやすい服装） 雪の中を歩ける靴（長靴やスノーシューズなど）

（以下、お持ちであれば） 双眼鏡 歩くスキーまたはカンジキ、スノーシューなど

(4) 申込方法

○電子メールでの申込

・電子メールの本文：参加申込者全員につき、下記の(A)～(E)の全項目をご記入ください。

- (A) 氏名
- (B) 年齢または学年
- (C) 参加者住所
- (D) 参加者携帯電話番号（緊急時の連絡に必要です）
- (E) スキー・カンジキ・スノーシュー等の有無
- (F) 自家用車での参加の有無
- (G) フォーラム参加の有無（「調査のみ」または「フォーラムも参加」）
- (H) これまでのクマゲラー斉調査参加経験回数
- (I) 所属団体（「日本野鳥の会札幌支部」など、サークル等の団体での参加の場合）
- (J) その他連絡事項

・電子メールのタイトル：「クマゲラ調査申込（●●●）」←●●●には氏名を入れてください

・送付先：kumagera2016@gmail.com

北海道博物館 クマゲラー斉調査担当宛 （特設アドレス）

○FAXでの申込

・別紙申込用紙に必要事項を記入の上、FAXでご送付ください。

・FAX送付先：011-898-2657 （北海道博物館）

○電子メール・FAXとも使えない場合

・お電話で、野幌森林公園を守る会（代表・松山潤 自宅 011-387-1317）までご連絡ください。

（19:30～21:00の間をお願いします。）

○受付期間：2月13日（土）～3日5日（土） 17:00 必着

以下のとおり、電子メールまたはFAXでお申し込みください。（できるだけ電子メールでお願いします。）
ご家族やグループでの参加の場合、必ず1通にまとめてお申し込みください。

【第2部】クマゲラ・フォーラム

(1) 定員 100名（先着順）

(2) 参加料 無料

(3) 申込方法

フォーラムのみご参加の場合は、お電話でお申し込みください。

電話：011-898-0500（北海道博物館 行事申込専用ダイヤル）

受付期間：2月13日（土）～3日5日（土）

受付時間：開館日の9:30～17:00

今回のクマゲラー斉調査は、北海道博物館の研究プロジェクト「野幌森林公園の生物インベントリー調査」による市民参加型調査を兼ねて実施します。クマゲラ・フォーラムは、同プロジェクトによる公開研究会を兼ねて開催します。

第30回 野幌森林公園クマゲラー斉調査

FAX申込用紙

FAX送付先：011-898-2657（北海道博物館）

以下のとおり、クマゲラー斉調査に申し込みます。

所属団体	サークル等の団体でのご参加の場合はお書きください。(例:「日本野鳥の会札幌支部」)
------	---

- ・ 以下は、参加者1人1人についてお書きください。
- ・ 住所など共通の場合は省略しても結構です。
- ・ E欄には、歩くスキー、カンジキ、スノーシューなどをお持ちの場合はご記入ください。
- ・ E欄には、自家用車でご参加の場合はその旨ご記入ください。
- ・ G欄には、クマゲラー・フォーラムにも参加される場合は○をご記入ください。
- ・ 10人を越える場合は、複数枚に分けてご記入・ご送付ください。

	A 氏名	B 年齢	C 住所	D 携帯電話番号	E スキー等	F 自家用車	G フォーラム	H 過去の参加回数
	(例) クマゲラ太郎	36	住所不定(野幌森林公園内)	090-XXXX-XXXX	歩くスキー	車あり	○	5回
1								
2								
3								
4								
5								
6								

その他、連絡事項	(例:「○○と△△は親子なので2人で1つのメッシュを希望」など)
----------	----------------------------------

受付期間：2月13日（土）～3日5日（土）

- 主催：野幌森林公園を守る会
- 共催：北海道博物館／野鳥お勉強会
- 協賛：北海道新聞野生生物基金
- 協力：北海道野鳥愛護会／NPO法人本州産クマゲラー研究会



クマガエラの生態について紹介する有沢さん

クマガエラの森守ろう

道博物館 研究者有沢さん講演

道内などに生息する天然記念物クマガエラに関するフォーラムが12日、札幌市厚別区の北海道博物館で開かれ、クマガエラ研究の第一人者として知られる東大北海道演習林(富良野市)元助手の有沢浩さんが「クマガエラと生きる」と題して講演した。

クマガエラはキツツキ科で、国内では東北以北に生息。有沢さんは1963年から、富良野市を拠点にクマガエラ研究を続けている。有沢さんはクマガエラの生

態について、個体ごとにねぐらを持つことや、一度つがいになるとペアを代えないことなどを紹介。「クマガエラ」の一番の天敵は人間。ダムや道路建設で天然林を伐採し、すみかを狭めてきた」と述べ、動植物の生態系に配慮した開発の必要性を訴えた。

(水野富仁)

知っ得 北海道

●あすクマガエラフォーラム、生息調査 天然記念物クマガエラを野幌森林公園(札幌市厚別区など)で年一回調査する「野幌森林公園を守る会」は12日午後1時半から、厚別区の北海道博物館で初のクマガエラフォーラムを開く。

同日午前の一斉調査が、1987年の開始から30回目となるのを記念した。東大北海道演習林(富良野市)元助手の有沢浩さんから研究者4人が生態などを話す。

同会は調査参加者も募集している。午前8時45分に同館集合。公園内を500区画に分け、生息数を調べる。保険料100円が必要(高校生以下無料)。詳細は同館ホームページで。いずれも申し込みが必要。調査の問い合わせは同館 ☎0

11・898・0466へ。フォーラムは無料で、申し込みは同館の専用ダイヤル ☎011・898・0500へ。

野幌森林公園に住むクマガエラの生息数を調べるフォーラム

野幌森林公園に住むクマガエラの一斉調査30回記念の調査とフォーラム

3月12日 北海道博物館ほか

国の天然記念物で、絶滅のおそれがある危険種として環境庁のレッドデータブックに掲載されているクマガエラの生息数を調べるクマガエラ一斉調査&クマガエラフォーラムが3月12日(土)に北海道博物館と野幌森林公園で開催される。調査フォーラムはそれぞれに申し込みが必要。野幌森林公園を守る会と北海道博物館、野鳥お勉強会の主催。午前中に野幌森林公園で

クマガエラの一斉調査が行われ、午後からクマガエラの研究や生態などについて専門家の話を聞くフォーラムが行われる。

【第1部クマガエラ一斉調査】午前9時〜昼12時 北海道博物館集合 野幌森林公園参加費(保険料)100円。高校生以下は無料。中学生以下は保護者同伴。暖かい服装と双眼鏡、昼食、筆記用具、あればスキーやカバンしきを用意して。

【第2部クマガエラフォーラム】午後1時30分〜5時 北海道博物館参加無料。フォーラムのみの参加の場合、事前電話 ☎898-10500 で申し込み先着100人。フォーラムでは、午前中の一斉調査の結果発表、北海道に比べて情報が少ない本州のクマガエラ研究史や道内のクマガエラの生態などについて専門家による講演とパネルディスカッションの

道新野生生物基金 (18日) ◇江別市、野幌森林公園を守る会は北海道博物館で開かれたクマガエラに関するフォーラムで、募金箱に集まった1万1500円を北海道の野生生物を守るために寄付した。

後、野幌森林公園だけではなく日本のクマガエラの過去と現状、これからの課題について話し合う。

◆講演①本州産クマガエラ研究小史 岩手県立博物館首席専門学芸員 藤井 忠志 学芸部長(NPO) 法人 本州産クマガエラ研究会理事 長 ◆講演②クマガエラと生きる 元東京大学北海道演習林助手 有澤浩さん ◆報告①クマガエラの生物学 帯広畜産大学 藤巻裕蔵 名誉教授 ◆報告②野幌森林公園のクマガエラを守る会 富川徹事務局長。問い合わせ 北海道博物館 ☎898-0466。

札幌でクマガウラ調査

参加申し込みきょうまで

12日実施 行動記録し生息数推測



クマガウラで営巣する国の天然記念物、クマガウラ
—黒松内町で14年5月28日、手塚耕一郎撮影

生態紹介のフォーラムも

札幌市近郊の道立自然公園・野幌森林公園で12日、市民によるクマガウラ調査が実施される。調査は今年で30回目、市民による長年のデータ蓄積は貴重。同日午後には記念フォーラムも開催され、クマガウラを育む自然を考える。

クマガウラは全長約45センチになる日本最大のキツキで、黒い体と赤い頭頂部が特徴。国の天然記念物で、環境省レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。野幌森林公園は約2050秒の敷地内に落葉広葉樹林が広がり、多くの野鳥が生息しており、市民団体「野幌森林公園を守る会」が1987年から毎年、一斉調査してきた。

調査には60人以上参加し、500以四方ごとに配置。一定時間観察し、クマガウラの行動を記録して生息数を推測する。回会によると89年までは最大クマ羽が確認され、その後減少し2001年以降は1〜2羽だったが、近年は回復傾向にある。公園内の遊歩道などで頻りに姿が目撃されるようになったという。

クマガウラ一斉調査での最大確認個体数
※2013年は荒天のため調査中止



クマガウラは巢木を掘るために直径50〜60センチの太い木が必要で、エサの虫やアリは倒木や老木に多く発生する。縄張りは1羽300秒にも及び、生息には、

若木から老木までバリエーションよく豊かな森が一定以上の広さが必要とされる。回会の松山潤代表は「クマガウラの存在は豊かな森の指標だ。民間で長く調査を重ねてきた例は少ないと評価する。フォーラムでは研究史や生態を紹介する。

回会は調査フォーラムへの参加を呼びかけている。調査は12日午前8時45分に北海道博物館(札幌市厚別区)集合で、参加費1000円(高校生以下無料)。フォーラムは同日午後1時半から北海道博物館講堂であり、参加無料。申し込みは9日まで。問い合わせは北海道博物館(011-898-0466)。(三股 智子)

野幌森林公園クマガラ一斉調査 第30回記念 クマガラ一斉調査 & クマガラ・フォーラム

日時：2016年3月12日（土）8:45～17:00

場所：○北海道博物館 講堂 / 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 ○野幌森林公園内

主催：野幌森林公園を守る会

共催：北海道博物館、野鳥お勉強会

協賛：北海道新聞野生生物基金

協力：北海道野鳥愛護会、NPO 法人本州産クマガラ研究会

会場・調査準備：北海道博物館

資料作成責任者：富川 徹

資料作成：松山 潤、水島 未記、早坂 泰夫、長谷 孝一、金井 陽一、松原 寛直、葦澤 千代、
堀 繁久、今堀 魁人、鹿川 美咲（順不同）

写真・録音：葦澤 裕二、中田 達哉

野幌森林公園クマガラ一斉調査 第30回記念
クマガラ一斉調査 & クマガラ・フォーラム 報告書

発行年月日：2016年5月

編集・発行：野幌森林公園を守る会 会長 松山 潤

事務局 〒069-0835 江別市文京台南町47-31 富川 徹方

本報告書は、(公財)北海道新聞野生生物基金の助成により作成したものである。